

---

# 古代アメリカ学会会報

## 第 50 号

---



図版 バルサマラグア遺跡の調査区と調査参加者©スターリン・イサ

---

### 目 次

---

|                                   |    |                 |    |
|-----------------------------------|----|-----------------|----|
| ◆会長あいさつ                           | 1  | ◆研究懇談会の報告       | 37 |
| ◆第 15 期新役員の紹介                     | 3  | ◆本学会協力・後援事業の報告  | 40 |
| ◆特集：古代アメリカ研究、未来へのバトン<br>—教育の現場から— | 4  | ◆会員の受賞 / ◆会員の叙勲 | 41 |
| ◆会員からの寄稿                          | 25 | ◆事務局からのお知らせ     | 42 |
| ◆自著紹介                             | 29 | ◆編集後記           | 46 |

---

2025 年 7 月

\*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます

## 古代アメリカ学会 30 周年、2 期目の会長就任と会報 50 号の発行に寄せて

青山 和夫（古代アメリカ学会第 15 期会長）

第14期に引き続き、第15期会長に就任致しました青山和夫です。古代アメリカ学会は、2025年で30周年を迎えました。南北アメリカ先史学・考古学とその関連分野の日本で唯一の学会です。毎年開催される研究大会が2025年12月でちょうど第30回を数えます。日本で唯一古代アメリカ関連を扱う年刊学会誌『古代アメリカ』は第28号、そして会報は本号で記念すべき第50号になります。歴代会長の大貫良夫会員、加藤泰建会員、関雄二会員と井口欣也会員、そして学会草創期から現在に至るまで学会の発展のために多大なご尽力をいただいている志の高い役員と会員の皆様に深く感謝申し上げます。



『古代アメリカ』創刊号は、編集委員（主）の関会員の献身的な努力によって1998年に発刊され、私の巻頭論文と3本の研究ノートが所収されました。初代会長の大貫会員が「創刊号の発刊に寄せて」において、古代アメリカ学会が「大きく育つとは単に会員の数が増えることとは違う。そこにはいろいろな意味が含まれると思う。ひとつには会員の研究が国際的なレベルで評価されるような成果を生み出すことである」と書かれています。会報第48・49号の「会長あいさつ」でも述べたように、学会の基本的・長期的な目標は、①研究水準の強化、②国際化、③研究成果の社会還元と次世代の育成の3本柱です。

このうち①研究水準の強化と②国際化については、この30年間に多くの会員の研究成果が国際的なレベルで高く評価されていることを大変嬉しく思います。このことは、過去30年に日本人研究者が海外で出版した古代アメリカと関連分野の英語・スペイン語の論文・書籍数と被引用数が、それ以前よりも飛躍的に増加したことに如実に示されています。その要因の一つが、30名を超える会員が国内だけでなく海外で博士号を取得したためといえるでしょう。インパクトファクター

の高い国際誌に英語査読論文を出版し、英語の書籍を海外で上梓して学術国際貢献を果たす会員もいます。さらに研究成果をスペイン語書籍・論文として現地で公刊して調査国に還元する会員も目立ちます。古代アメリカ学会は、南北アメリカ先史学・考古学とその関連分野の研究の発展に寄与する学術団体です。研究者は、国際的なレベルで学術貢献すると共に、成果を調査国と日本の学界・社会に還元し続けなければなりません。

2020年と2021年の古代アメリカ学会研究大会・総会は、コロナ禍でオンライン開催を強いられました。2022年12月に名古屋大学の研究大会・総会で対面開催が再開され、2023年12月に京都外国語大学で開催された第28回研究大会では22本の発表、2024年12月に慶應義塾大学日吉キャンパスで開催された第29回研究大会では、20本の発表を数えました。1996年6月に東京大学で開催された第1回研究発表会の発表は3本、私がアメリカ留学後に初めて発表した第2回研究発表会（1997年5月、日本教育会館）の発表は6本のみであり、隔世の感を禁じ得ません。なお第29回研究大会は、実行委員長の渡辺裕木会員、実行委員の山本睦会員、研究担当の吉田晃章会員、代表幹事の井上幸孝会員、事務幹事の中川渚会員、事務幹事補佐の荘司一步会員、会計担当の荒田恵会員らのご尽力により滞りなく進めることができました。心から御礼申し上げます。

会誌は学会の顔であり、質と量をより一層高めていかなければなりません。編集委員（主：鈴木真太郎会員、森下壽典会員、山本睦会員、福原弘識会員）によれば、『古代アメリカ』第28号には例年を大きく上回る数の原稿が投稿されたとのこと。古代アメリカ学会30周年にふさわしい、古代アメリカ学会史上で最も充実した会誌になる見込みです。

また会報の質・量が、会報担当委員（第14期の主：五木田まきは会員、瀧上舞会員、第15期の主：瀧上舞会員、渡辺裕木会員）が特集を組むことによって大幅にレベルアップしています。本50号で

は、「古代アメリカ研究、未来へのバトン—教育の現場から—」というテーマで特集が組まれました。そして会報のPDF版を学会ウェブサイトで公開して、学会の内外で共有することができました。学会ウェブサイトを効果的かつ円滑に運営して下さったウェブ・広報委員（第14・15期の主：松本剛会員、第14期のダニエル・サウセド会員、第15期の荘司一步会員）に深く感謝申し上げます。

研究懇談会は、東日本幹事の金崎由布子会員と西日本幹事の土井正樹会員の企画によって、2024年11月16日と2025年6月7日に東京大学、2025年5月17日に関西外国語大学において開催され、大変活発な議論が行われました。前者は超ベテランの大貫会員、後者はアンデス文明に関する大学院博士後期課程に所属する2名の若手会員の発表でした。ベテラン研究者だけでなく、これから日本の古代アメリカ研究を背負っていく若手・中堅研究者が、優れた研究成果を生み出して研究大会や研究懇談会だけでなく、国内外の他の学会でも活躍されると共に、書籍や論文をどんどん出版されることを楽しみにしております。

③研究成果の社会還元と次世代の育成については、古代アメリカ学会が力を入れてきた中学歴史・高校世界史の教科書における古代アメリカの記述を改善する努力を今後も継続していただきたいと強く希望します。なぜならば教科書改善は、研究成果の最大の社会還元の一つであり、次世代の育成に繋がるからです。古代アメリカ研究の裾野を広げるためには、わかりやすく低価格の入門書を出版し、良質なテレビ・ラジオ番組や新聞、良心的な一般雑誌、公開講演会、一般向けシンポジウム、ウェブサイトなど様々なアウトリーチ活動を展開して研究成果を日本社会に広く還元し、知の再生産が効果的に行われるように努めていくことが重要です。

一方で私がピッツバーグ大学大学院で博士号(Ph.D.)を取得した1996年と比較すると、文科省のResearcher<sup>+</sup>（リサーチャープラス：世界で活躍できる研究者育成プログラム総合支援事業と世界で活躍できる研究者戦略育成事業による取組、<https://www.researcherplus.mext.go.jp>）、科研費の若手研究、研究活動スタート支援、国際共同研究事業、二国間交流事業をはじめ、若手研究者への支援が拡充しています。しかしながら古

代アメリカや関連分野を専攻する大学院生にとって、国内外の常勤研究職への就職の機会が非常に少ないという現実は今も昔も変わりません。本当に心の底から研究が好きならば、現地調査に基づく良い論文を出版し続けて自分の道を自分で切り開き、常勤研究職をゲットされることを大いに期待しております。

古代アメリカ学会の益々の発展を祈念して、本会報の自著紹介でも紹介させていただいた青山・大城・角道『考古学者だけど、発掘が出来ません。多忙すぎる日常』（ポプラ社、2025年）で私が担当した章「メキシコ・中米マヤ文明考古学者の多忙な日々」の最後に書いた「若い人に伝えたいと思う個人的信条」をあえてここに載せさせていただきます。それは、私がこれまでの研究人生で実践すべく鋭意努力してきたことでもあります。「昭和的な価値観」かもしれませんが、時代を超えて変わらないものもあるかと思います。参考にしていただければ幸いです。

「若い人に伝えたいと思う個人的信条がある。人生を幸せに生きる上で、重要なことが四つある。①情熱。何事も情熱だと思う。仕事でも勉強でも、自分の中から情熱がふつふつと沸き起こってこないと長続きしない。②愛。家族の愛も含めて周囲の人たちのサポートや理解が重要だ。③希望。若い人を見ていると、艱難や試練があるとすぐに諦める傾向がある。最後までチャンスや可能性がある限り、希望を持ち続けて絶対に諦めないことが大切だ。④根性。これが最も大事。同じくらいの実力の持ち主がいれば、根性がある人が最後に必ず勝つ。」

第15期（2025年1月～2026年12月）は、代表幹事の渡部森哉会員、事務幹事の中川渚会員、事務幹事補佐の南智博会員、監査委員の松本雄一会員と村野正景会員、運営委員の皆様を中心に学会を運営していきます。役職を快く引き受けていただいた方々に深く感謝申し上げます。引き続き役員と会員の皆様と共に、古代アメリカ学会と日本の古代アメリカ研究を発展させていきたいと思えます。学会活動への積極的なご参加と運営へのご協力をくれぐれもよろしくお願い申し上げます。

---

---

## 第 15 期 (2025.1.1～2026.12.31) の役員紹介

---

---

選挙結果と青山和夫新会長の任命により、第 15 期役員が決定しました。学会の運営につきまして、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

会 長 青山 和夫 (茨城大学)

代表幹事 渡部 森哉 (南山大学)

監査委員 松本 雄一 (国立民族学博物館)

村野 正景 (静岡大学)

事務幹事 中川 渚 (名古屋大学)

事務幹事補佐 南 智博 (南山大学)

運営委員

会 計 荒田 恵 (天理大学附属 天理参考館)

会誌編集 鈴木 真太郎 (岡山大学)

福原 弘識 (埼玉大学)

山本 睦 (山形大学)

森下 壽典 (早稲田大学高等学院)

ウェブ・広報 松本 剛 (山形大学)

荘司 一步 (山形大学)

研 究 吉田 晃章 (東海大学)

会 報 瀧上 舞 (国立科学博物館)

渡辺 裕木 (慶應義塾大学)

会報は今号で50号となります。これまで大御所から若手まで多くの会員に寄稿して頂きました。学会20周年および会報40号の記念号では、当時古代アメリカ学会長であられた関雄二会員並びに大貫良夫会員、中村誠一会員から、学会発足の経緯や今後への期待について熱いメッセージを寄せて頂きました。それから9年が経ち、学术界の状況はさらに変化し、近年は学生・若手研究者への支援の拡充や就職先の増加など、研究者を目指す人々の環境には改善も見られる一方で、常勤研究職への就職は依然狭き門であるなど、将来への不安が、研究者を目指す若い世代の減少の一因と考えられています。そんな中、古代アメリカ学会では2015年から、高等教育検討ワーキンググループが発足するなど、古代アメリカ研究の裾野を広げるための活動が進められて来ました。このような状況を背景に、今号では「古代アメリカ研究、未来へのバトン ―教育の現場から―」と題して、中・高・大学や、修士・博士課程の様々な段階の教育現場における古代アメリカ教育の現状と、未来に向けた期待・課題について特集を組み、6名の会員の方々に記事をご執筆頂きました。

## ●特別支援教育とアンデス文明をつなぐ

市木 尚利（東京都立田無特別支援学校）

### はじめに

2003年から現在まで南米チリ、ペルー、そして日本の教育現場で働き、様々な特性を持つ児童生徒と一緒に学びを積み上げてきた。当初は、ただ何となく“できない子”、“苦手なことがある子”などとしてしか見てこなかったが、その遠因には特性が関わっていることを知った。それからは児童生徒が自立に向かって必要な技能を身につけることを意識して、私自身学校等での授業に工夫を重ねるようになった。教員経験を少しずつ積み重ね、現在は特別支援学校に勤務している。今回、特別支援教育とアンデス文明をつなぐことの意味について私見をまとめてみたい。

### 1 アンデス文明と障害者自立

滋賀県でアンデス文明の織物を探究され、近江学園あざみ寮で機織り指導にあたって来られた石原繁野氏の活動について触れておきたい。私自身、2018年に日本に帰国するまで、全く存じ上げずお会いしたこともなかった。石原氏との出会いを契機に同氏の『あざみ織』[石原1984]を読むようになった。同書にはあざみ寮生らのエピソードが収められ、天野博物館やチャンカイ文化のことも紹介されている。

読み進めると、機織りを通じて変化していく寮生らの様子が感じられる。現在のように合理的配

慮のある特別支援教育や就労支援がない時代の、石原氏と寮生らの奮闘記録とも言える内容である。

あざみ寮で寮生らが身につける手仕事として機織りが導入され、そして様々な機織りの先生らとの出会いを通じて、寮生らが前向きに社会生活を送る姿勢が育っていくように感じられる。「むすび織」の技法を身につけた寮生らの手作業から、アンデス文明に由来する図像文様で彩られた織物が生み出されていく。もちろん、それだけでなく日本の伝統文化に系譜を持つ文様も寮生らの手仕事の中で融合されていき、オリジナルの織物が生み出されていく様子が見えてくる。そして、寮生らにとって機織りが「作業教育ということではなく、生き甲斐」として育ち始めたという石原氏の言葉[石原1984:70]は印象深い。

石原氏の取り組みは1970年代から80年代ということ考えると特別支援教育とアンデス文明を結ぶ先駆的なものとして位置付けられ、現在でも教育現場とアンデス文明をつなぐ試行錯誤を進めるにあたり多くのヒントを含んでいるのではないかと思う。

### 2 特別支援教育に関わって

2018年3月に日本へ帰国した後、外国人児童生徒の学習支援のために公立小中学校等で勤務

した時には、特別支援学級や通常学級で外国人児童生徒が知的障害、発達障害、肢体不自由などの児童生徒と一緒に学ぶ光景を目の当たりにした。2021 年から勤務した私立高校では人権教育委員長を務める立場から、生活上の困難を抱える様々な生徒と一緒に学習する機会を得た。そして人権教育担当者を対象にした研修で、大学のゼミで四則計算ができない学生がいることに気づいた担当教員が時間を割いて算数を一緒に学習していたというエピソードを知った。

今も振り返ると、南米に渡った 2003 年から出会ってきた児童生徒の中には本来であれば特別支援を必要とした者が多くいたのではという思いが残り、私自身が特別支援の技能を身につけていれば、もっと国内外を問わずできたことがあるのではないかと思う。

しかし、そのような児童生徒の中に国際交流やアートプロジェクトを通じて興味関心の幅が少しずつ広がり、前向きに社会に参加しようと変化していく者もいることに私自身が次第に気づくことができ、さらに授業構成、教材、発問の仕方等に工夫を重ねるようになった。そして、機会があればアンデス文明を題材として授業を行い、国内外の民族や異なる価値観を持って生きる人々との関わりへつなげようともしてきた。

2024 年度からは、縁あって知的障害を対象にする特別支援学校で勤務するようになった。特別支援学校では各教員の専門教科にとらわれずに様々な授業を担当する。私の場合では社会科、職業に関する教科、美術、数学、国語をはじめ自立支援に係る諸々の教科に横断的に関わり、メイン授業者となることもある。また、児童生徒と一日中過ごすため、様々な話題を取り上げやすく、ラテンアメリカやアンデスの文明や歴史につながるような活動を計画しやすいと感じている。

例えば、特別支援学校の美術部で埴輪をテーマにした制作活動があった。私自身は直接関与することができなかったが、制作の指導にあたった教員らから聞いたところでは、埴輪について学び得られた感触を元に、生徒自身が自分オリジナルの作品を生み出すものだった。作品制作に参加した生徒の中には、家族の支援を得ながら東京国立博物館での「はにわ」展に出かけ、自分なりに外の世界につながり、興味関心の幅を広げようとする姿が見られた。

また、私がメイン担当した授業で学習内容を広げる話題としてラテンアメリカ、チリ、ペルーの歴史文化を取り上げることがあった。スペイン語に関心を持ったり、チリやペルーのスポーツに関心を持ったりして授業後に質問する生徒も複数名みられるようになった。時折授業で交える話題を契機に、ある生徒から、マーチン・ファン・クレフェルトの『補給戦』という本を薦められることがあった。薦めてくれた生徒は、担当教員の一人として私が行う「流通」の授業を受講してくれていた。彼が流通に関心を持ったのは、19 世紀の植民地主義の本がきっかけだったようで、現代までの国際的な物流に興味を持っている。ラテンアメリカについて話を振ると関心を持ってくれたようで、パナマ運河の存在が、船の設計や構造にも影響を与えたのではないかという話をしてくれることもあった。

このような生徒の姿は、ラテンアメリカやアンデスの歴史文化を学校教育へ還元するうえでヒントになるように感じられた。もちろん全てのケースで有効ではないが、本来の授業で習得する学習内容だけでなく、興味関心の幅を広げ、異なる観点から物事を考えようとする態度を育てることに繋がっていくように感じられる。特に、何かモノに触れ、制作するような活動は、「象徴機能」の発達を育て、興味関心の幅を広げてくれるのではないかと思われる。

同時に授業での対話的な関係は、私自身も生徒から知らない事柄を学び、相互に興味関心の幅が次第に広がっていくのを実感している。勿論、目の前にいる生徒たちは実に多様で苦勞も多いが、授業での工夫次第で生徒らの反応が変わり、とても興味深い。例えば、授業で興味関心、応答や受容の態度を示さなかった生徒が自分の考えやエピソードを語ってくれる場面が出るようになり、応答や受容の幅に変化が出たりした。またそういった生徒自身からの質問が契機となって、たくさんの会話が授業内で生まれる場面もあった。このような生徒の変化を特別支援学校で経験することができている。

### 3 「象徴機能」の発達

「象徴機能」は、生活空間において身体外部からの様々な刺激とそれへの反応を往還する中で発達するものと考えられる[浜田 2002]。象徴機能

の発達「言葉による抽象的な思考につながる、考える力の基礎」[立松 2011: 8]となり、身体内で象徴を理解し、身体外の世界との関係性を構築できる力となってくれるものとされている。

「象徴機能」が弱いと、言葉で理解して考えたり、表現したり、説明したりすることに困難を抱え、自らの生き方や興味関心の選択肢、応答や受容の幅を広げることも難しく、児童生徒の自立を促すことにもつながっていかないようにも思われる。

特別支援学校で勤務するようになってからも、前節でも述べたように、「象徴機能」の発達を促す教材として物質文化の研究成果は有効ではないかと感じている。現在は、重度・重複学級の担任の一人として生徒自立の歩みを一緒に楽しく過ごさせていただいている。生徒らが見せる様々な応答や受容の姿に接する時間は、私にとってかけがえのない経験となっている。

## おわりに

地域の多様性は象徴体系の違いに由来すると言われている[江坂・大貫 1984: 258]。地域の多様性を創出してきた象徴体系を受け継ぎ発展させるには、地域で暮らす一人ひとりの「象徴機能」を育み続けることが欠かせない。その一人ひとりに、特別支援教育の対象となる児童生徒も含まれる。

現代日本の特別支援教育に焦点を当てれば、対象の児童生徒数は 32 万人（2013 年）から 64 万

人（2023 年）と 10 年間で 2 倍に増加している[内閣府 2024: 58]。歴史文化の普及や活用には児童生徒の実態とリンクさせた試行錯誤が学校現場で必要と思われる。

このことを鑑み、地域と密着する学校と文明研究をつなぐパイプのような授業を日常的に続けることで、19 世紀から現在までアンデス文明の研究者たちが積み上げてきた成果が、困りごとでいっぱいの子供たちの中に生きる力の種の一つになってくれたらと思う。

勿論、アンデス地域に物理的に行くことが困難な生徒も多くいるが、アンデス文明を題材に生徒の前向きさを育てることにも繋げていきたいと考え、特別支援学校での勤務を続けている。これからも縁が続く限りアンデス文明の知見を日常の教育活動に落とし込む試行錯誤を続け、日々目の前の児童生徒と一緒に歴史文化を話題に楽しく関わる時間を過ごしていきたい。

## 参考文献

石原繁野 1984『あざみ織』サンブライ出版。  
江坂輝彌・大貫良夫 1984『文明の誕生』講談社。  
立松英子 2011『発達支援と教材教具 II—子どもに学ぶ行動の理由』ジアース教育社。  
内閣府 2024『障害者白書 令和 6 年版』勝美印刷。  
浜田寿美男 2002『身体から表象へ』ミネルヴァ書房。

## ●国内で引き継ぐ古代アメリカ研究の“未来へのバトン”

### —岡山大学での現状と理想論を語る—

鈴木 真太郎（岡山大学）

古代アメリカ学会会報には 2022 年発行の第 47 号における特集『海外で古代アメリカを研究する：中米編』にお声がけをいただき、筆者がメキシコで古人骨の研究を学んだ経験談を執筆させていただいた。今回、『古代アメリカ研究、未来へのバトン—教育の現場から—』という特集に再度お声がけを頂戴したので、その続編というわけではないが、現地で学んだ筆者が、現地の大学教育機関勤務を経て、国内の大学教育機関に奉職し、いかに古代アメリカ研究の“未来へのバトン”を繋げていくか。日々、苦悩し、模索している経過と、たどり着いたある種の結論を簡単に報告させていただこうと思う。

なお、“古代アメリカ”と非常に広義の単語を使っているが、本エッセイの中では実質中央アメリカ、メソアメリカと同義になってしまっていることをご了承いただきたい。また“研究”もかなり考古学へ引っ張られてしまっているが、こちらもお含み置きいただければ幸いである。また、本エッセイの内容はあくまで筆者の経験に基づく個人的見解、意見である。

#### 岡山大学での考古学教育（学部編）

ではまず現在筆者が所属する岡山大学の学部における考古学教育の特徴から紹介しよう。岡山大学といえば日本国内でも有数の考古学教育、研究の拠点である。近隣の埋蔵文化財調査研究にも多数の優れた人材を輩出しており、また県内に存在する国内最大規模の造山古墳などでも多くの先進的な研究を行っている。まさに国内の考古学をリードする機関の一つと言っても過言ではないだろう。その岡山大学で文学部に入学した一年生は、まず文学部生全体を対象とした〇〇入門や〇〇への招待といった基礎科目を履修する。その後、2 年次に進級する冒頭で専門分野、領域を希望し、晴れて考古学領域配属となった後、以下に挙げる専門的な科目を

全て履修する。こうして岡山大学で考古学を学んだ、“岡大”の看板を背負った考古学者となっていくのである。

そして、これらの専門科目のうち 2 年次で最重要とされる必修科目が、通年で開講される『実践演習』である。ここでは前期に遺物の観察と実測を学び、打製石器、磨製石器、大型土器、須恵器、土器破片、鉄器とバラエティ豊かな遺物ごとに精緻なカリキュラムが組まれている。さらに適宜、土器のトレース、接合と復元、拓本の技術も学ぶ。後期になると野外での測量技術の習得が中心となり、最後にデータの統計解析や基礎骨学鑑定についても簡単に学ぶ。

2 年次には同時に『人文学概説』も学ぶ。『人文学概説 (1)』と『人文学概説 (2)』に別れており、(1) ではまず考古学という学問の目的や基礎的な視点を学んだ後、人類の進化について数回の講義で取り扱い、それから残りの講義の大部分を費やして、日本列島の旧石器時代、縄文時代、弥生時代と、時代を追って、その考古学的な基礎を身につけていく。一方 (2) では、考古学のより普遍的、学問的なトピックについて、主に古墳時代を舞台に取り扱う。学問としての考古学の定義や、さまざまな研究素材の紹介、考古学の歴史、さまざまな研究方法論の紹介、時代区分という概念や資料の分類と型式学の基礎などが説明され、それから考古学による年代検証の方法と自然科学による年代決定の方法論を学び、文献史学との関係や分布論、遺構論も押さえつつ、古墳時代の基礎的な知識も網羅するという建て付けである。

ここまでが学生全員が全ての単位を確実に習得しなければならない考古学のいわば基幹教育である。そして、ここに担当者によって色合いが異なる外書講読＝『実践演習』と、純粋な

専門講義科目の『人文学講義』が加わる。これらは2～4年次に選択的に履修することになっており、担当者によって内容が異なるバージョン違いを全て履修しなければならないということはない。

外書講読は、担当者によって、外国語文献で再度、型式論、分布論、年代論を学び直したり、Colin Renfrew と Paul Bahn の『Archaeology: Theories, Methods, and Practice』を通読したり、筆者（鈴木）が担当する場合にはメソポタミアやエジプト、ギリシアなどを中心とした外国の都市考古学の教本を読み進めたりしている。ここにあまり体系的な一貫性はないように思う。『人文学講義』は担当者の専門性が強く押し出され、主に縄文、弥生の資料を対象としたジェンダー考古学や、古墳時代の王墓研究、古墳時代を中心とした手工業生産の研究など、各教員の強みを活かした特に専門的、先進的な知見に関する学びを深める。

最後が3年次から4年次まで続く『課題演習』である。これは各学生がこれまでの授業で興味を持ったテーマについて、毎週のグループ発表と教員からのコメントに基づいて自主的に研究を進める科目である。3年次の課題演習では、前期に縄文+弥生（あるいはメソアメリカ）、後期に古墳時代という大枠をそれぞれ定めており、学生たちはそれぞれの大枠内で各自自由にテーマを定めて研究を進め、それぞれ期末レポートを書いて卒論の予行演習とする。そして、4年次になると、これらの経験に基づきつつ本格的な卒論研究が始まるのである。3年次演習は専門性に基づいて担当が分かれるが、4年次演習は基本的に考古学の教員全員が担当し、集団指導の体制を採用している。

以上、かなりの紙面を割いて岡山大学における考古学の教育について紹介を行ってきた。日本の考古学教育のひとつの拠点とも言える教育機関の具体的な現状である。端的にとっても完成されたカリキュラムと言えるだろう。さて、一応、末席ながら筆者という古代アメリカ研究を専門とする専任の教員が在籍していることによ

って、果たしてここに古代アメリカ研究、教育が入り込む余地はあるのだろうか。筆者の結論は否である。もちろん「教養として古代アメリカのことを知ってもらう」あるいは「卒論として一定の水準に達する古代アメリカの研究をしていただく」などは現状でも十分に可能だと思う。そういった観点からは、手前味噌ながら、筆者が岡山大学に在籍している意味はそれなりに大きいとも思う。しかし、“未来へのバトン”を単に「裾野を広げる」あるいは「興味を持ってもらう」以上の「研究者の養成」として捉えた場合、筆者の結論は否なのである。

まず岡山大学考古学には岡山大学考古学の長い伝統と地域的なニーズがあり、筆者が単独で自由に講義内容を設定できるのは『人文学講義』だけである。ここではなんとか隔年で「マヤ文明圏のバイオアーキオロジー」と、広域の「メソアメリカの考古学」を取り扱っているが、どちらもたった半年間2単位の講義である。バイオアーキオロジーの方はテーマをかなり絞っているため十分に高い水準を維持している自負はあるが、メソアメリカの考古学はマヤ文明圏どころか、広大なメソアメリカ全体を見渡した講義である。一般的な学生に広く俯瞰した知識を持ってもらうため限界まで内容を圧縮しているので、その中の3回分の講義では狭義のマヤ考古学でさえも十分に教授することはできないように思う。ちなみに筆者の前任校であるグアテマラ・デルバジェ大学(UVG)では、マヤ考古学だけで“Maya 1”、“Maya 2”、“Maya 3”と地域に応じた3つ別々の講義（各回3時間で半年間続く）が用意されており、マヤ考古学者でも特に各地域に精通した研究者がそれぞれの講義を担当していた。ご当地のことなので、当然といえば当然の話なのだが、例えば筆者がもう一つ単独で担当している外書講読『実践演習』を今後メソアメリカ関連の内容に変更したとしても、UVGで考古学を学んだ学生と、岡大で同じく考古学を学んだ学生が並んだ場合、同じ「考古学者」でも、古代アメリカ研究者、古代マヤ研究者としては、そのスタートラインの基礎的なレベルに圧倒的な差がついてしまうのである（当然、逆もまた然り、であるが）。

## 岡山大学での考古学教育（大学院編）

では、大学院教育ではどうだろう。考古学を専攻する学生は多くの場合、岡山大学院社会文化科学研究科の博士前期課程人間社会文化専攻、総合人文学学位プログラム、研究深化タイプという所属になる。例えばここに他大学でいわゆる日本考古学を学んだ学生が、古代アメリカ研究者、古代マヤ研究者になることを望んでやってきた場合を想定してみよう。ここでは修了のために 30 単位以上の履修が求められており、その内の 8 単位が導入的な輪講の授業などに充てられる。残りの 22 単位を履修するため、考古学領域から合計で 12 単位分の講義が提供されており、ここに指導教員による『特別演習』が 4 単位（2 単位以上）加わる。残りの 6 単位分は日本史学領域、東洋史学領域、西洋史学領域が提供する科目で履修したり、あるいは重複履修が可能な考古学領域の単位でカバーしたりする。共通科目として開講されている例えば『GIS 演習』などを履修することもできる。

考古学領域が提供する 12 単位分は、外書講読に相当する『比較考古学演習』と、あとは教員個人の専門性が強い『考古文化論 1～3』と『考古学方法論 1～2』である。これらの講義は同じ名前であっても開講年によって担当者が変わり、内容も変わる。ちなみに筆者が担当する場合は『考古文化論』で骨学を、『考古学方法論』で多変量解析などのデータ解析を取り扱っている。『比較考古学演習』では Web of Science などのジャーナルデータベースの活用法や Journal Metrics のカラクリを教えつつ、英語論文を探すスキルを身につけてもらうと同時に、各自が自身の興味関心に合わせて選んだ英語論文をグループで読み、ディスカッションするということをしている。

さて、こういった建て付けの大学院教育において、日本考古学をバックグラウンドとする学生から古代アメリカの研究者を世界標準で育成することは可能だろうか。筆者はこちらも相当に難しいタスクであると感じている。まず日本で考古学を勉強した一般的な学生に、古代アメリカの先行知識を求めることが難しい。例えば、

メソアメリカとは何か。古典期とは何か。そういうところから教育を始めなければならない。加えて古代アメリカの研究ではスペイン語、英語の習熟が必須であるが、こちらも多くの学生にとってやはり高い壁になる。実に長いロードマップである。岡山大学では指導教員が受け持つ『特別演習』4 単位分も、実態はグループ発表に基づく集団指導であるため、日本考古学を専門とする学生、教員陣を傍に、例えばスペイン語で古典期について議論する、少なくともそういう訓練を積む、というのも、実際なかなか難しい。あるいは仮に筆者個人が担当する『文化論』と『方法論』、『比較考古学演習』を全て古代アメリカ研究に特化したものに変更したとして、さらに『特別演習』を完全なる個別演習に変えていただいたとして、合わせても合計 30 単位分の 10 単位である。筆者が学んだユカタ自治大学(UADY)の修士プログラムでは 200 単位中 200 単位でひたすら古代マヤ、バイオアーキオロジーを学んだことを考えると、尖った専門家の養成という視点からはやはりどうしても心許ない。

しかも、岡山大学で考古学を学びたいという多くの学生にとっては、概ねどの地域でも適用可能な知識である骨学とデータ解析、ジャーナル論文のリサーチ法を学ぶ方が、古代アメリカに固執した授業よりおそらくずっと有益であろう。少数派の学生のために、6 単位分の授業内容を大きく変更すること自体もやはり難しい。さらに正直なことを言えば、基本的に古人骨研究を専門とする筆者から、はたして 6 単位分の古代アメリカに特化した、大学院レベルの、体系的で、しかもしっかりと多様な知識を身につけられる授業を捻り出せるかどうか、実は若干疑問である。

つまり、多くの学生により有益であることを念頭にすでに完成しているカリキュラムの中、大学院から新たに始める古代アメリカ教育の長いロードマップの実現は、基本、教員の時間外個別指導と学生個人の授業外自主学習に依存せざるを得ない。そして、古代アメリカ研究者も一人しかいないため、その専門性はやはりどう

しても筆者に近いものに傾かざるを得ないのである。

### 理想論を語る

さて、ここまで随分とネガティブな現状を整理してきた。繰り返すが、岡山大学考古学研究室は日本考古学の拠点の一つである。その教育カリキュラムは、学部によ、大学院によ、非常によく練られており、精緻に完成している。当然、教員陣も（筆者以外）皆、超一流である。近隣には国内有数、世界的に見ても大変興味深い古墳、遺跡が多数存在しており、日本を対象地域とした考古学を学ぶためなら、おそらくは世界最高の環境の一つだろう。ただ、古代アメリカ研究、教育について、筆者がメキシコで多くの碩学から受け取ってきたような、海外の研究者と堂々と伍していけるような世界標準の“未来へのバトン”を、岡山大学で次の世代に渡すことができるかと問えば、上記のようなネガティブな現状はやはり否めない事実だと思う。

しかし、もちろん、このまま現状を嘆いていても何も始まらない。古代アメリカ研究の“未来へのバトン”はなんとしても、必ず引き継いでいかなければならない。ただ単に「本気でやりたきゃ、海外へ行け」と言うだけでは、大学教育現場の末席に座る者としては、やはりあまりに空虚である。もちろん他機関のことはわからない。ただ、例えばメソアメリカに絞っても、すべての地域、あらゆる時代、さまざまな遺物の種類やトピックを含め、世界標準で網羅的に教授できる、博士学生を指導できる機関というと、やはり少ないのではないかと推察する（繰り返すが、あくまで筆者個人の見解である）。

では、どうするか。

筆者はここで京都外国語大学の大越翼会員にかつてうかがった教授の壮大なアイデアを思い出す。すなわち単位互換を伴う国内留学である。毎年刊行される会誌『古代アメリカ』を見れば、日本国内にも相当数の古代アメリカ研究者がおり、それぞれの専門性は実に多岐にわたることがわかる。筆者個人が個人的な繋がりの中でふと考えるだけでも「国内で Maya 1 を開講するとしたらあの人だな。Maya 2 はあの人だ。そして Maya 3 は。。。」と、何人かの同輩、先輩の顔も浮かぶ。古代アメリカ学会の総力を上げれば、“Arqueología de México 1”も、“Arqueología de México 2”も、“Arqueología de Oaxaca”も、“Etnohistoria”も、日本国内で世界水準の授業を行うことができるだろう。どうしても国内で担当できる研究者がいけないような分野があれば、何年かに一回の集中講義という形で海外の研究者を招いても良い。もちろん「Bioarqueología は俺に任せてくれ!」と胸を張って言いたい。学問としての考古学の基本的な考え方、技術は、岡山大学でも、あるいは別の大学の考古学研究室でも、国内の教育が基本的に世界中で通用するはずである。皆が協力すれば、世界レベルの古代アメリカ研究者を国内で養成できるのかもしれない。あるいは到底実現不可能な大いなる夢物語なのかもしれないが、国内外の複数機関を繋げた古代アメリカ教育の大学間コンソーシアムの創出という理想論を、一度くらい古代アメリカ学会で膝突き合わせて本気で検討してみても良いのではないだろうか。複数の専門家に囲まれ、多彩な意見を取り入れながら、岡山大学という最高峰の環境で日々学びに邁進する幸せそうな日本考古学の学生たちを眺めていると、そう強く感じるのである。

## ●若手研究者が育つ場

渡部 森哉（南山大学）

### クントウル・ワシでのトレーニング

筆者がはじめてペルーに渡航したのが 1995 年。クントウル・ワシでの発掘調査には 1996 年から参加させていただいた。同年代の多くの仲間とともに時間を過ごすことで研究者としての経験が培われた。今度は我々の世代が後継者にバトンタッチできるようにしていかなければならない。

現在、クントウル・ワシのような理想的な現場経験の機会はない。そもそも大学院博士前期課程、後期課程でアンデス考古学を専攻できる場が少なくなってしまった。数少ない場の 1 つが南山大学であるから環境を整えていかなければならない。

1958 年から始まった日本人によるアンデス文明研究は、形成期の神殿をチームで集中的に発掘し、報告書を刊行するという特徴があった。基本的に日本調査団は 1 つのチームだった。ところが 1990 年代から大学院重点化の方向に進み、人文社会学系の大学院生であっても博士号を取得しなければ就職が難しくなった。そのため、クントウル・ワシでトレーニングを受けた後に、院生がそれぞれ自分のテーマに合わせて遺跡を選定し、発掘調査をするというスタイルが主流となった。現在もその流れは続いている。そのため、大学院での指導は、遺跡を選定し、調査実施にこぎ着けるまでの伴走という性格が強くなった。再び日本における同年代の研究者が互いに切磋琢磨していく状況を作るために学会を通じて横の繋がりを強化することが望ましい。

### 博士論文の条件

アンデス考古学の博士論文は、自ら発掘調査をするにせよ、あるいは遺跡の出土遺物の分析を担当する形にせよ、オリジナルなデータが必要であるという点で、かなりハードルは高いと言える。中国などでは外国人が調査することが不可能に近いので、日本人学生が自力でオリジナル・データを得て博論を執筆することはない。将来的に、外国人が調査を実施するのが難しくなるかもしれないが、それまでは大学院生

レベルでもオリジナルのデータが必要となる。大学院生にとっては、発掘のトレーニングのみならず、調査を指揮するために必要なスペイン語の運用能力の向上が求められる。そのためには長期にペルーに滞在する必要がある。そしてその経費を獲得することが条件となる。

### 調査とお金

1990 年代は円高であったので、ペルーでの滞在費は比較的安かった。今はチケット代、滞在費など高額となっている。そのため、大学院生のために滞在費の支援、渡航費の支援が必要となる。南山大学では「南山大学大学院博士後期課程奨学支援」という制度で「1 年間の授業料および施設設備費の半額を支援」を毎年申請できることになった。また院生も申請できる国際化推進事業の助成金もできた。それ以外にも、調査の資金を獲得する必要があり、学外の助成金の申請が基本である。例えば希有の会の助成金は大学院生にとってありがたい制度である。

### 博士号の取得と就職

筆者が大学院生の頃、アンデス考古学では就職できないのだから、文化人類学とスペイン語も教えることができるように準備しなさい、と言われ続けてきた。現在でもより広く教えることができることが有利であることに変わりはない。申請書や報告書の執筆を通じてスペイン語の能力が上がるであろう。また南山大学大学院の人類学専攻では文化人類学と考古学が一緒になっており、博士前期課程では主領域として考古学を、副領域として文化人類学を学んだという証明書を発行できる。これが将来、大学院生の就職に役立てば、と期待している。文化人類学が近いという点では、他大学でアンデス考古学を学ぶ場合も状況は似ている。

非常に狭い専門分野での就職はなかなかないのであるから、より広い対象を教えることができる人材の育成が求められている。日本のアンデス考古学研究は、文化人類学者によって始まり、その傾向は現在まで続いている。

## ●ラテンアメリカ教育・言語教育と学生の関心をいかにつなぐか

鳥塚 あゆち（青山学院大学）

### 私とラテンアメリカ研究

インカ、ナスカ、マヤ、アステカ、これらの言葉には独特の魅力がある。私もその何とも言えない魅力に取り憑かれた一人である。今では文化人類学を専門とし、ペルー南部高地で牧民社会を対象に調査・研究を行っているが、私が最初に魅了されたのはインカだった。

中学生の頃、田舎の書店に貼られたマチュピチュが表紙のポスターを目にし、お小遣いを貯めて『図説 インカ帝国』（フランクリン・ピース、増田義郎著）を購入したのが、ラテンアメリカ研究との出会いだった。中学生には難解な内容で、高い買い物をしたのに写真だけを眺めていた時期は長かったように思う。

高校生になり「世界史」が社会の科目に入ると、それまで学ぶことのなかったインカについて知ることができるのかと期待した。しかし、当時の教科書に満足できる記述はなかったし、授業での補足説明もなかったと記憶している。それだけに、本学会でワーキンググループが結成されて中・高等教育の現場に積極的にはたらしかけ、世界の最先端をいく研究の成果が教科書記述などに反映されたことは、学会員の一人として感慨深いものがあった。

その後、大学では多少ラテンアメリカ文化を学ぶ機会に恵まれたものの、学部案内のパンフレットにマチュピチュの写真が掲載されていたにもかかわらず、講義では古代文明について触れられることはなかった。ゼミに入り、卒業論文を書いていくなかで、ようやく専門書やクロニカを読むことになった。思い返すと、『図説 インカ帝国』購入からずぶんと時間がかかっている。

第二外国語選択についても同じことが言える。スペイン語を選択したかったが、選択肢には中国語・ドイツ語・フランス語しかなかったため、高校の先生の勧めでドイツ語を選択した。せめてロマンス諸語に属するフランス語を選ぶべきだったと今ならわかる。つまりは、関心とカリキュラムのマッチングの問題、それから情

報収集の下手さにより、比較的早くにラテンアメリカに興味をもったにもかかわらず、やや遠回りをした。

以下では、これらの経験も踏まえ、私が大学でどのような授業を行っているのか、教える際に何を重視しているのか、またそのなかでの課題について、おもに大学生を対象とした授業実践から考えてみたい。

### 言語科目とラテンアメリカ関連科目

海外で調査を行うには言語の習得が欠かせない。ラテンアメリカ地域なら、スペイン語かポルトガル語が主要な、習得すべき言語となる。ラテンアメリカ研究者の多くは、大学で開講されている授業を受講し、その後の使用を通じて言語を獲得したことだろう。私も大学生の頃に初めてスペイン語に触れた。すでに述べたように、私の場合は第二外国語の選択肢にスペイン語がなかったため、「講読」の名称で開講されていた授業で文法を習った。

第二外国語のスペイン語科目を例にとると、選択必修の文法、それとペア履修のコミュニケーションの2科目設定がよく見られる。所属大学である青山学院大学も同様のカリキュラムとなっている。本学では、2年次まで第二外国語を必修にしているのは、現在では国際政治経済学部のみとなってしまう、学生の多くは1年間だけ英語以外の外国語を学ぶことになる。選択科目としては、中上級レベルの文法とコミュニケーション、会話、週に4コマをセット履修するインテンシブ、さらにリーディング（文献精読）の各科目が開講されている。将来的な使用を見据えて上位科目まで受講する学生もなかにはいるものの、残念ながら、できれば1年で終わりたいというのが学生の本音であることは、選択科目の履修者の少なさから判断できる。

多くの大学では言語科目と、その言語に関連する科目が設定されている。ラテンアメリカ関連科目は、専門的にその言語を学ぶ外国語大学や外国語学部のコース科目、言語以外の学部で

は第二外国語との関連性で展開されることが多いように思う。ほかには、学問分野のなかで配置される地域研究関連科目だろうか。

実際に、私がこれまで担当してきた授業は次の通りである。上智大学外国語学部開講の「西米概史」、「ラ米先住民の歴史と社会」、専修大学の教養科目「世界の言語と文化(スペイン語)」、関西外国語大学外国語学部の「現代ラテンアメリカ」、「ラテンアメリカ学概論」、そして青山学院大学の「イベロ・アメリカ文化論」と「スペイン語圏の社会と文化」である。

これらのなかにはラテンアメリカコースの必修科目もあれば、第二外国語の関連科目として開講されているものもある。青山学院大学では、「スペイン語圏の社会と文化」が全学を対象とした教養科目のひとつで第二外国語と関連して開講されているのに対し、「イベロ・アメリカ文化論」は所属先の国際政治経済学部が開講する「文化論」の一科目という位置づけにある。

### 授業の実践、学生の関心

この機に、上記の講義で取り上げたテーマを確認し直してみたところ、すべての授業で古代アメリカ文明を扱っていた。1 Semester 15 回の授業のうち 1~2 回のこともあれば、3 分の 1 ほど割いている科目もあった。繰り返しになるが、私の現在の研究対象は現代の先住民社会であり、直接的に「古代」を対象としているわけではない。それでも古代文明を必ず扱うのは、文化や社会の連続性を重視しているからである。加えて、「未知」と思われる内容を学ぶことで学生に視野を広げてもらいたいという気持ちもある。これらの理由から、講義科目では、地理と自然環境、古代文明から始まり、「発見」と征服、独立までを通史的に概説し、授業の後半で現代における課題を盛り込みながら、信仰や生業、言語、食文化などのトピックを学ぶシラバス構成にしている。

残念ながらいまのところ、歴史や古代文明に興味はあっても古代アメリカ文明を中心に学びたいという学生を教えたことはない。学生のおもな関心は現代社会にあり、とくに青山学院大学の学生は国際系の仕事に就くのに役立つかもしれない、新興国・途上国の問題に関心がある

からといった理由で授業を履修することが多い。昨年度の「イベロ・アメリカ文化論」のアンケートでは、古代文明に興味があると回答したのは 31 人中 7 人だった。この授業では、グループワークの一環として、授業内容に関連したプレゼンテーションを実施している。昨年度は発表テーマを自由選択にしたところ、6 グループのうち 1 グループがナスカの地上絵を取り上げたが、他は、食文化、信仰、芸術、植民地化の影響など、古代文明以外を発表テーマとして選定した。

同様の傾向は第二外国語のスペイン語選択の動機からも伺える。履修者へのアンケートでは、国際協力に関心があるから、スペイン語の話者数が多いから、就職を考えてといった将来を見据えた理由や、おもにスペイン文化に興味があるからという理由が多い。今年度は 36 の回答数のうち、「ラテンアメリカ」を理由にスペイン語を選択したのはわずか 5 名だった。履修動機が、必ずしもその言語が使用される地域にあるわけではないことは他言語でも同じなのか、上記講義の履修者にはスペイン語を選択していない者も多い。

大学や学部の性格にもよると思うが、やはり現代の出来事への関心がより大きいようである。しかし、古代文明や遺跡が好きという学生や、スペイン語を習ってスペイン語圏を旅行しマヤの遺跡を見に行きたいという学生もいる。知らないがゆえに、関心の範囲にないだけということもあり、新たな知識を得たことでその幅が広がることは、発表テーマの選択からもわかるだろう。

### ゼミの状況

ゼミ(演習)についても少し触れておきたい。私のゼミは「ラテンアメリカの文化と社会」を全体のテーマとし、学生は 3・4 年の 2 年間でラテンアメリカに関する知識を習得して、各自が選定したテーマで卒業論文を仕上げることを目標としている。国際政治経済学部のゼミは必修ではないため、ゼミに所属せずに卒業する学生も毎年 1 割ほどいる。なかには 1 年でゼミをやめてしまう学生もいる。加えて、卒業論文も必須ではなく、書くか否かはゼミによる。中途

半端なカリキュラム設計だと常々感じているが、仕方がない。

スペイン語やポルトガル語を専門とする学科でない場合、ラテンアメリカ地域研究を対象としたゼミを開講してもなかなか学生が集まらなと複数の教員から聞いた。私の学生時代を思い返してみても、ゼミ（西洋史近現代）でラテンアメリカのことを卒論テーマにしていたのは2〜3人だけだったと記憶している。本ゼミでは幸いにも、ほぼ毎年上限の人数（約7名）が登録している。志望動機としては、講義を受講して関心をもったというものの以外では、幼少の頃に中南米の国に住んでいたことがある、子どもの頃の友人に中南米出身者がいた、多様な文化のなかから自由に卒論テーマを選択できるなどがある。また、第二外国語でスペイン語を履修してラテンアメリカに興味をもったという学生もいる。

3年次にゼミに入ってからすぐは、「ラテンアメリカ」にどの国が含まれるのかもわかっていないため、国の特徴を調べるところから授業を開始する。その後、基本となる本を共通テキストとして輪読していく。私が学生の頃に比べれば日本語で読める本はずいぶんと増えたものの、初学者向けでラテンアメリカ全体を扱っている本は少なく、毎回選定に頭を悩ませる。通常、2冊ほどを選び1 Semester半をかけて読んでいく。このうち1冊は、古代文明や植民地時代の内容が含まれる本を選ぶようにしている。講義同様、現代のラテンアメリカ社会を知るには、現代の内容だけでは不十分だと考えるからであり、ゼミ生にもゼミに入る段階でそのことは伝えている。意外にも、本ゼミを希望する学生のほとんどは「歴史を学ぶことに抵抗はない」と言う。輪読は読解力を養い、必要な知識を得るとともに、各自が卒論のテーマとなりそうな内容を探すことを目的としている。

4年次になると、各自が卒論テーマに関する文献調査を進め、何度か論文の方向性を修正して、夏休み頃から執筆にとりかかる。2025年度の4年生が二期生のため、全体の傾向を見出すのは時期尚早ではあるものの、現段階での卒論テーマはすべて現代社会に関連したものとなっている。3月に卒業した学生は、日本とチリの

防災協力関係、グアテマラの対米移民問題、ブラジルのアサイー生産とアグロフォレストリーをテーマに論文を完成させた。今年度の4年生は、メジャーリーグ野球と中米市場、メキシコ農業の持続可能性、アルゼンチン女性の権利獲得、死者の日の社会的影響などを題材に卒論を書く予定だ。大半のゼミ生の関心は、当該地域のことを深く知りたいという方向性とは少し異なるように感じることもあるが、「ラテンアメリカのことは知らなさ過ぎて難しい」と言うわりに、各自が興味深いテーマを選んでるように思う。

論文執筆の際の大きな課題は言語能力にある。ゼミ生のなかには第二外国語でスペイン語を選択していない者もいるため、スペイン語やポルトガル語で書かれている論文を読むことはできない。言語が障壁となって先行研究がうまく見つけられず、テーマの変更を余儀なくされるケースもある。他方で、本学部の学生の場合、英語で書かれたものを読むことにあまり抵抗がないのか、英語では、こちらが指示しなくても自分で必要な情報を探してくる傾向にある。

### 高等部の学問入門講座

ところで、青山学院には幼児教育から高等教育までの機関があり、幼稚園、初等部、中等部、高等部の校舎は大学の青山キャンパスに隣接している。高等部からの内部進学者も多く、高大連携事業の一環として、2003年から大学教員が高校生に授業を行う学問入門講座が実施されている。これは、コロナ禍以前は対面の出張講義だったそうだが、現在は各学科から1名がオンデマンドで授業を提供している。また、履修可能な授業は限定されるものの、高等部で成績の基準を満たし、審査を通った生徒が大学の授業を先行履修できる制度もある。

学問入門講座は、高等部の生徒の卒業要件となっているようである。生徒は年次ごとに、提供される科目のなかから授業を自由に選択する。大学側の提供意図としては、内部進学への進路のミスマッチを防ぐこと、また入学前に大学の授業を体験することで学習へのモチベーションを高めることにある。

偶然にも、昨年度に私が担当した入門講座を

受けた高等部3年生の生徒2名が、今年度前期の科目「文化研究概論Ⅰ」を先行履修していたので、講座受講の動機などについて聞いてみた。高校生は、講義テーマと教員名から興味のあるものを選び受講するという。また、志望する学部・学科の授業がどのようなものかを知るのに役立つと話していた。なかには、講義名からは想像しなかった内容もあるようで、「思っていた内容と違った授業もあった」とのことである。

ホームページを参照すると、大学教員は高校生が受講することを想定し、専門用語を極力避けて講義タイトルをつけているようである。大学からは概要提出の依頼もあったため、高校生はそちらも参照しているものと思われるが、聞き慣れない用語もあるせいか内容が想像しにくいかもしれない。私が高校生の頃とは異なり、情報検索も容易になった。大学のシラバスでも同様の要求があるが、わかりやすさを意識して、また内容に齟齬がないように情報発信することが求められている。それでも、自身の関心と想像の範囲外にある内容のマッチングは難しいのだろう。

私は「新しい言語を学び異なる文化を知る」というタイトルで、スペイン語とラテンアメリカ文化を例に言語学習と異文化理解の関係について講義を行った。「ラテンアメリカ文化」のパートでは研究対象地域のペルーを取り上げ、基本情報、多様な自然環境、食文化、古代文明などについて概説した。文化人類学に関するテーマを設定することも可能だったが、ラテンアメリカ研究の裾野を広げたいというささやかな希望から、地域研究関連の内容にした。

2名の高校生は、高校ではラテンアメリカについては地理の授業で少し触れる程度で、まったく知らない世界の話だったため興味深かったと話してくれた。地域による食文化の違いや遺跡が出てきて楽しかったとのことである。ちょうど先行履修科目も同じ教員が担当していたので、大学の文化研究概論も受講したという。今回は、一貫教育の強みが生きたと言えるだろう。

### 未学習内容に対する学生の反応

高校までの教育で、どの程度ラテンアメリカに関する知識を身につけられるのだろうか。高

等部の生徒が証言するように、そのウエイトはあまり大きくないようだ。大学でのラテンアメリカ関連の講義でも、「世界史を選択していなかった」という理由から、高校生・大学生の「世界」のなかからラテンアメリカの歴史は存在しないものとなっていることもある。数年前に、コロンブスも知らない学生がいたときは絶望すら感じた。他方で、テオティワカンが教科書に出てきたから知っているという学生もいて驚いたこともある。

古代アメリカ文明は、研究者の認識ではおもに考古学や歴史学分野の射程だが、学生は「世界史」の一部と捉えているようだ。高校での教育もかつての暗記重視から、アクティブラーニングを取り入れた主体性重視の教育に変わり、思考力や表現力の向上が目指されている。しかしながら、「世界史は覚えることが多くて好きではなかった」という学生も一定数おり、歴史上の出来事をどのように教えるかには検討の余地がありそうだ。このような学生は、古代アメリカも含めた「歴史」を大学の講義内容に含めると、初めは身構えてしまうようである。しかし大学では、年号や人物、出来事を暗記しなければならないわけではないため、授業を受けて「歴史に対する認識が変わった」という学生もいた。

知らないことに対してどのように感じるかは、人それぞれだ。私の場合は、不安よりも新たなことを知る魅力のほうが大きかった。初めに触れたように、ラテンアメリカについては高校までで学ぶ内容は極めて限定的だったため、大学の授業には大きな期待があった。教壇に立つようになって感じることは、馴染みのない地域や高校までの学習が少なかった地域、つまり未知の知に対峙した際の学生の感じ方の変化である。私の能力不足も否めないが、古代文明のパートは難しかった、どのように理解すればよいのかわからないという意見も聞かれる。自主学習できるよう参考図書の案内もしてはいるが、「十分に理解できなかったからもう少し自分でも勉強してみよう」というより、教員に教えてもらいたいという姿勢が垣間見られる。

もちろん、すべての学生に同じ傾向があるわけではない。一昨年度、昨年度に感じた変化と

しては、歴史が好きという学生がやや増え、古代文明のわからなさに興味がある、知らないがゆえに毎回新しい内容が出てきておもしろいという意見もあった。「イベロ・アメリカ文化論」は他学部履修が可能な科目で、着任後2年間で見ると各年30~35名ほどの履修者のうち、一昨年度は4人、昨年度は5人が他学部からの受講生だった。文学部のほか、経済学部や法学部からも履修者がいる。彼らは、アルバイト先に中南米出身者がいる、ラテンアメリカ諸国を舞台にした小説を読んだ、グローバル化が進むなかで他者を知る必要があると考えた、遺跡が好きだからなど様々な理由から、関心をもってそのような科目を探して履修している。

近年は、留学などを前提に優秀な成績を収める必要性から、少しでも事前の知識がある、あるいは身近な内容を扱っているような授業のほうを理解しやすいと考え、「知らなさ過ぎる」授業を選択しないという学生もいる。そのようななか、未知の内容を楽しもうという学生がいることは、私たちラテンアメリカ研究者の希望になる。

### 過去と未来、地域と言語をつなぐために

約15年前に教鞭をとるようになった頃と比較すると、近年ではとくに「すぐに役立つ知識を効率よく学びたい」という学生が増えたように思う。大学にもよるのだろうが、大学はもはや学問を修める場ではなく就職のための通過点となっており、ときに、授業も大学内外での諸活動もそのための必要条件でしかないのではと感じることさえある。私自身は、視野を広げるためにも、「余計」と思われることを学ぶ重要性はあると強く主張したいが、他方で現代の「コスパ・タイパ重視」の風潮は学生にも蔓延している。

こう考えると、現代の事象に関心がある学生には、古代文明の学習は、本来学びたい（と錯覚している）こと、あるいは「役に立つ」と予想していることから遠回りのように思えるのかもしれない。視野を広げるどころではなく、初めから特定の内容を学んだり、スキルを身につけたりすることを目的とするような学習姿勢を取る学生は決して少なくない。しかしこれは、

学生だけの問題ではなく、学問に集中する4年間を確保できない社会の問題でもあるだろう。

このような現状で、最初の「錯覚」を変えさせるには何が必要だろうか。情報過多の現代では、情報そのものを集めることは難しくない。しかし、高等部の入門講座のようなミスマッチを防ぐためには、発信する方が明確に意図を伝える必要がある。学習の最初のきっかけとなるよう、未知の内容を「不安」と思わず、「おもしろいかもしれない」と思わせるような情報発信が必要だろう。

それから、学生の関心におもねる必要はないとは言え、その関心に寄せる努力もするべきである。教員側は、過去を学ぶ重要性和おもしろさを粘り強く教えると同時に、過去がどのように現代とつながっているのかを示すことも肝要だ。程度の差はあれ、学生は新たな知識を吸収したいと思う気持ちをもっている。既知の事象や身近なことへの関心から、どのように世界を広げさせるかは教員の意識と工夫次第である。勉強してみたら興味が出たということは往々にしてあるし、ラテンアメリカも古代文明も、きっかけさえあればそのおもしろさに取り憑かれてしまう人がいる分野である。きっかけ作りのために、学生の関心の多様さに教員側が少し歩み寄ることも必要だろう。また、長期的な視野で物事を見られる姿勢を身につけさせるためにも、古代から現代までを断絶したものと捉えないような教育が求められる。

最後に、私がよい解決策を見出せていない問題を書いておきたい。それは、地域研究と言語教育のつなぎ方である。英語教育への偏重や、文系科目および第二外国語を不要と考える大学も出てきたなか、AIも普及するようになり、学生の英語以外の言語を学ぶモチベーションが低くなってきたように思う。地域への関心より国際問題への関心が大きい場合はとくに、当該地域の言語を習得する必要性を感じにくいのか、英語さえできればなんとかなると考える学生が多い。スペイン語やポルトガル語は中南米地域の主要な言語ではあるが、同地域には多くの先住民言語も存在する。先住民言語の習得度が低い場合は、スペイン語やポルトガル語が意思の疎通に欠かせない共通言語となり、これらの言

語に英語が取って代わる日はまだ先のように思う。「英語だけでなんとかなる」ということはなく、また機械に頼っているようでは本当の意思疎通に遠く及ばない。

講義ではこのようなことを伝えているが、なかなか効果が出ていない。他方で、第二外国語の授業では、時間の制約から十分に地域のことを話すことができない。地域に関する講義と言語教育の相乗効果で、ラテンアメリカや古代アメリカへの関心が高まるのが理想だろう。効果的な授業実践があればご教示いただきたい。

### 参考資料

青山学院高等部

「学問入門講座」

<https://www.agh.aoyama.ed.jp/education/cooperation/guide.html> (2025 年 6 月 17 日最終閲覧)

「高等部生徒による大学授業の履修」

[https://www.agh.aoyama.ed.jp/education/cooperation/class\\_university.html](https://www.agh.aoyama.ed.jp/education/cooperation/class_university.html) (2025 年 6 月 17 日最終閲覧)

## ●美術大学における考古学の授業について

浅見 恵理（埼玉大学）

### はじめに

数年前から武蔵野美術大学で前期に日本考古学を、後期にアンデス考古学の授業を担当している。それに加えて博物館実習も1クラス担当しており、美大生に考古学的手法を伝えている。かつて、装飾古墳の壁画の模写やモースが調査した大森貝塚の実測を、著名な日本画家たちが担っていたことから、研究の初期から日本考古学と芸術家は密接な関係があった。現代の美大生は直接的には考古学との接点はないが、自分の作品作りに生かすため、意欲的に授業へ参加する学生が多い。各回で意匠や文様に重点を置く授業、建築の技法や規格性に焦点を当てた授業、また製作技術の差異から異なる文化間の様相を解説する授業、さらに原材料の入手や加工法、自然科学分析による原材料の原産地推定について説明する授業を行っている。

考古学の授業はオンラインのため学生の表情が見えないので、授業の途中で必ず一つか二つの質問を投げかけることにしている。そうすると我先にと回答をチャットで送ってくるので、しっかり授業を聞いていることが伺える。また様々な回答が並び、学生も他の人の意見を知ることができて楽しいようだ。私自身、思ってもみない回答があると思わず「なるほど～」と驚きを声に出してしまったり、笑ってしまったりと非常に楽しませてもらっている。

### 学生の反応

毎回、授業後に感想を提出してもらっている。製作技術や原材料の解説は彼らの作品制作に直結するようで、自分でも試してみたいという感想が多くみられる。アンデス考古学の授業については、土器や染織品に表現された文様や形は彼らの感性を刺激するようで、自分の作品に取り入れたい、と前向きに思うようだ。特にモチエ文化の図像で、神話的人間、すなわち動植物の特徴をもつ人物像の奇抜さが新鮮でおもしろいとの感想も多い。当時の世界観の理解はなかなか難しいが、身近なもの（動植物や自然）を

モチーフにしたり、様式化したりする点は共感できるようだ。逆に、各文化の多様な埋葬方法を紹介すると、日本とは全く異なる形態に「理解が追い付きません」という素直な反応がある。なかには、葬送儀礼に関して、改めてきちんと考える契機になったという学生もいる。

成績評価のために課題レポートの提出を必須としている。いくつかテーマを設定しているが、興味のある文化に焦点を当てるテーマでは、やはりナスカ文化の人気は高く、毎年提出されるレポート数は最多を誇る。次いで、インカ文化が多い。両者は古代アンデスのイメージとして定着していることもあり、学生が取り組みやすいのだろう。また、各文化を横断するテーマも設けており、建築様式の比較、土器の差異や変化、図像の解釈に関するレポート等が提出される。学生の専攻する専門領域に引き付けて論じる内容は、俯瞰的で非常に興味深い。私自身、考古学的視点でモノを見ることに慣れてしまったため、彼らの芸術家としての分析視点に、気づかされることも多々ある。

### 実際に作ってみる

日本考古学の縄文土器の授業で、「縄文原体を作ってみよう」という課題を出す。粘土に縄文原体（植物繊維を撚った糸）を転がすと、縄目の文様が現れるのである。材料は麻紐だけでなく身近なもの何でも可とすると、学生たちはビニール紐、毛糸、リボン、電子機器のコード(!?)等でチャレンジする。また、粘土がない場合は、原体に絵の具を塗って白紙に転がしても良い、とすると色鮮やかな作品が提出される。なかでも陶芸専攻の学生はお手の物で、縄文土器を作ってしまう。完成度の高さに感心しきりだ。縄文とは、単にヒモ状のものを撚って転がすだけなのだが、無数の組み合わせがあり、それが思いもよらない模様を生み出すことに学生は驚く。

アンデス考古学のインカの授業では「キープを作ってみよう」という課題を出す。紐の長さを調節して結ぶのだが、なかなか難しいようだ。

単純な作業にもかかわらず、「結び目を作る」ことがこんなにも手間がかかることなのか、と気付く。そして、学生たちは結び目や結ぶ行為に意味があることに感動し、水引やしめ縄、沖縄の藁算に通じる文化的共通性に興味を抱くのである。

どちらも考古学への導入という点で取り組みやすいため、様々なところでワークショップが実施されている。古代の人々の営為を身近に感じ、現代を見つめ直すきっかけになっている。

### 考古学的手法の伝達

博物館実習を担当して今年で3年目になる。武蔵野美術大学には民俗資料室があり、約9万点の資料が収蔵されている。その一部の資料をお借りして、実測、トレース、拓本の実習を行う。考古学の原点であるモノと向き合う、という姿勢を学生に経験してもらうのである。いくつかあるコースの一つであり、モノ作りや描くことに興味のある学生が選択してくれる。

彼らに実測方法を教えると、まず定規で測る作業に時間がかかり、悪戦苦闘する。それと同時に、どの測点をとるのか、その点と点を結んだ線が何を意味しているのか等、モノを観察して考えながら点をとる必要があることを伝えると、また悩んでしまうのである。注記で観察事項をすべて記述する際には、見ているようで見ていなかった様々なことが見えてくる、と驚嘆する。実測は、彼らが描き慣れているデッサンとは何もかも異なるため、意識を変えるのが大変だと声を揃えて言う。



写真1 実測作業の様子

その次に、実測図のコピーの上にトレーシング

グペーパーを重ねて、黒インクと3種類のペンでトレースを行う。現代ではパソコンでやる作業を、かつて私たちが学部生の時にやっていた方法で学生に体験してもらうのである。ペン先の特徴やインクの量、曲線を描く際の手の動きを理解しながらやらないと、うまくいかない。ペンの使い方に戸惑いながら、最初はガタガタの線しか描けない学生たちは、何度も練習しながら上達していく。一本の線を引く難しさを初めて知るのである。線に興味がある、と言っていた学生は、描くことに集中しすぎて感覚が麻痺してきたと疲労感を漂わせていた。それでも、最後は良い線が描けたと満足そうであった。

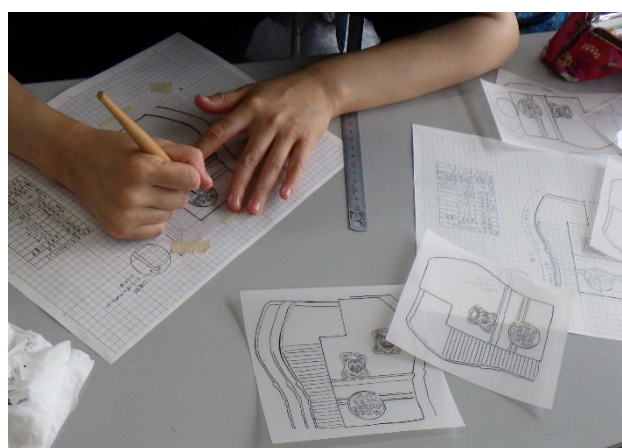


写真2 トレース作業の様子

3つ目は拓本である。これは縄文土器の破片で実践する。土器片の大きさに合わせて画仙紙を切り、水を含んだ脱脂綿や筆を使って、紙を土器に密着させる。紙が破けたり、水分量の過不足によりうまく墨がのらなかったりして、失敗続きにうなだれる学生が多い。墨をのせる作業は楽しいらしく、徐々に文様が浮かび上がってくると笑顔になる。試行錯誤の末に会心の作ができあがると、「先生、見てください!」と意気揚々と報告してくれる。

最後は彼らの作品を展示という形にまとめる。学生たち自身が展示のコンセプトを考え、ポスターや展示パネルを手作りし、作品を大学構内で展示する、という流れである。展示に関しては、学生が他の授業で習得した知識や技術を発揮する良い機会でもある。写真撮影や動画の作成、パネルやキャプションの構成とデザイン、キャラクターデザインなどを分担して行う。彼

らの本領発揮の場であり、その手際の良さに驚かされる。

毎年異なる展示に仕上がるので、準備は大変だけれど楽しみでもある。考古学的手法を用いた作品をどのようにアートに昇華させるのか、真剣に練り広げられる展示の作戦会議はおもしろい。私自身、考古学とアートの接点がどのようなものか模索中である。



写真3 展示作業の様子

### まとめと課題

これらの授業の共通点として、考古学を通してモノを見る視点が広がったという感想が多くみられる。自分自身が創造する立場にある学生にとって、やはり古代のデザインや製作技術は非常に参考になるようだ。また、遺物の分布状況やデザインの変化から、古代社会の様相が読み取れるなんてすごい、と関心を示す。翻って自分の作品は現代社会でどのような位置づけになるのだろうか、と自己分析をする学生も稀にいる。「作品制作に限界を感じ、芸術に対して悲

観的になっている」と悩んでいた学生は、授業で考古学の世界に触れ、自分がテクニックや思想に縛られ過ぎていたことに気づき、ちょっと視界が開けた、というようなことを述べていた。発掘作業に興味を抱く学生はたくさんおり、様々な質問がくる。なかには実際にアルバイトを探す強者もいるが、学業との両立は大変なため、あまりお勧めはしない。このように、大なり小なり、学生たちの意識の変化が見て取れる。最初は美大で考古学が受け入れられるのかと憂慮していたものの、微力ながら彼らの役に立っていることが分かり、考古学の意義を再認識している。

美大での授業は、古代アメリカ研究者の育成という点では貢献できないが、少しでも裾野を広げられたら良いと思う。ほとんどの学生は、考古系の博物館や特別展示に行かないのが現状である。そのため、授業内でニュース等の記事や展示のお知らせ、アプリを使用した地域の文化財活用の様子等を紹介し、身近に感じられるよう工夫している。「作ってみよう」の課題もその考えに基づいている。常に情報のアンテナを張り、学生が考古学に興味を持ち、制作や展示見学といった行動に移してもらえるよう尽力している。

今後の課題としては、学生を通して、さらに他の人々や分野へ広がっていくような取り組みをすることである。それがどのようなものか、まだ手探りの状態である。古代アンデス研究や考古学が現代社会に浸透し、多くの人に関心をもってもらえるよう、魅力を伝えていきたい。

## ●高等学校における古代アメリカ教育の現状と今後の期待・課題

多々良 穰（東北学院榴ヶ岡高等学校）

今号で「古代アメリカ研究、未来へのバトン—教育の現場から—」という特集を組むにあたり、原稿執筆の声をかけていただいた。最近では考古学というよりも教科教育の視点から研究を進めていることもあるので、僭越ながら高等学校で世界史探究の授業を実践している立場から書かせていただく。

### 出発点は高校生の関心を高めること

古代アメリカ文明の授業を担当する場合、出発点で重要なことは高校生がこの文明に対して興味を持つように仕掛けることだろう。授業の最初で生徒の心をつかむかどうかは、その後の授業展開に大きな影響がある。そのため、現地での体験談を話すことが効果的であり、スライドを投影して視覚に訴えることが有効である。今回は掲載しないが、担当教員の姿が映っている写真をスクリーンに投影すると、生徒の表情は一変する。遺跡の紹介はもちろんだが、現地での風習、調査の大変さを語ると、生徒の関心は高まるようである。その際、自分の失敗談も話すようにしており、経験不足から本気度が甘くて調査員に迷惑をかけたり、気を緩めたために体調を崩したりしたことを、自戒を込めて話題にする。現地で自分自身が学んだことを共有することも大事で、世界史探究の授業内容をきっかけにして、2022年度の新課程から始まった「総合探究」の研究テーマに古代アメリカ文明を選ぶ生徒も見受けられる。つまり「外的動機づけ」が重要だということだ。

### 世界史探究としての授業で目指すこと

古代アメリカ文明に限らず、歴史を教えるというスタンスは、最近の高校現場では徐々に減っているように思う。以前拙稿でも書いたが、知識を増やす「コンテンツ」重視の授業から、考える資質・能力を育成する「コンピテンシー」重視の授業へと移行しているからだ。学習指導要領では「何を理解しているか」「何ができるようになるか」「どう活用するか」に重点が置かれている。教育現場では、三観点からの評価が義務付けられている。すなわち、(1) 歴史的特質を理解し、世界史の大きな枠組みと展開に関わる「知識」を、諸資料を用いて適切かつ効果的に読み取り調べる「技能」、(2) 資料等を適切に

用いて、歴史的事象の意味や意義、特色など自分が考察したことを説明・論述したり、他者の意見をもとに考察・構想したことを再構成しながら議論したりする「思考・判断・表現力」、(3) 生徒自身による「学びに向かう力」、の3つの力を身に付けられるように教員が工夫することが求められている。

旧課程の「世界史B」から新課程の「世界史探究」となり、何が変わったのかを議論する機会が先日あった。受験科目として考える場合、どうしても知識が重要だという視点があり、教科書に掲載されている用語を覚えなければいけないという考えにとらわれがちである。実際、私立大学を中心に入試問題の内容が旧課程のときとほぼ変わらないケースもあり、知識重視の傾向から脱しきれない教員も少なくない。

だが、大学入試共通テストの「歴史総合・世界史探究」問題を分析すると、単純に知識（暗記）だけで解ける問題数は多く見積もっても32問中11問であり、いかに読み取り能力や思考力が試されているかがわかる。つまり、そうした能力を身に付けることが「世界史探究」に求められている。学習指導要領には「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成すること」が目標として掲げられている。また、「世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力」などを身に付けることが求められている。これらを念頭におき、授業でどのような問いを発したらよいか考える必要がある。<sup>ii</sup>

### 「問いの表現」の重要性

授業中に生徒が考えるという学習活動を進めやすくするために、教員側から「問い」を提示することが重要である。生徒自身が疑問を持ち、それを自ら

問い作りに活かせれば理想であるが、実際はなかなか困難である。そこで問いの質を考え、教科書を読みとれば答えが見つかる「作業」と、得た知識をもとに自分で考える「唯一の解答がない深い問い」を区別しておく必要がある。例えば、「作業」に相当するのは以下のような問いである。

- ・マヤ文明の特徴は？
- ・インカ帝国の特徴は？
- ・古代アメリカ文明と他の文明との相違点は？

一方、「唯一の解答がない深い問い」は以下のよう  
なものである。

- ・なぜアンデス文明には文字がないの？
- ・当時の社会で欠かせないものは何だろう？
- ・古代アメリカ文明から学ぶべきものとは？

後者の問いが歴史学習にとって非常に大切であることは言うまでもない。そして、この種の問いは多面的に考えなければならず、他の仲間の解答が勉強になることも多々ある。こうした問いを授業の始めに提示し、授業の目的を共有することが重要である。これが「内的動機づけ」となり、筆者が欠かさず毎時間の授業で行っていることである。つまり、「問いの表現」を予め準備しておくことが教員に課せられていると思う。

## 実際の授業

では、実際に行った 2025 年度の授業（指導案は表を参照）を紹介する。まず、授業の最初に次の 3

つのことを生徒たちに提示する。

- ・単元のテーマ

古代文明が成立した状況を多角的に考える。

- ・今日のテーマ

古代アメリカ文明の特質を理解する。

- ・今日のゴール

古代アメリカ文明と他の文明の相違点は何？

次にペアの対話が進みやすいように、アイスブレイクの問いを出し、生徒が意見交換した。

- ・アイスブレイク

アンデス文明にはなぜ文字がなかったのだろうか？

- ・教科書の精読 → 問いの表現 1

教科書をじっくり読み、個人で疑問に思うところをピックアップする。そしてペアでその疑問点を共有し、自分たちで調べてわかることは解決し、残った疑問点を全体の「質問コーナー」に出し、教員から解説したり、生徒同士が調べたりする。この学習活動を通じて、クリティカル・リーディングが習慣化されてきている。

- ・スライドによる解説

基本的にここから教員の解説が始まる。短時間だが、その前に生徒たちは PC や資料集を使ってある程度調べているので、教科書に載っていることを網羅的に説明する必要はない。むしろ、いくつかの要素を取りあげることでポイントを絞ることができる。授業で解説したのは、以下の項目であった。

| 時間  | 構成          | 内容                         | 教員の動き                                                      | 生徒の動き                      | 使用するもの等<br>その他      |
|-----|-------------|----------------------------|------------------------------------------------------------|----------------------------|---------------------|
| 3分  | 準備          | ペア作り<br>プリント配信             | スクリーンや機器の設置<br>ペア作り（一人で学習したい生徒の確認）<br>Chromebookで予約配信      | ペア作り（座席移動）<br>各自配信プリントを開く  | スライド<br>PC or プリント  |
| 2分  | 導入          | 授業の概要                      | 単元および今日のテーマと今日のゴールを提示<br>授業内容の確認                           | 単元全体で考えることと授業目的を意識し、流れを確認  | KP法                 |
| 2分  |             | アイスブレイク                    | アンデスにはなぜ文字がなかったの？                                          | ペアで考え、答えを共有                | 対話のみ                |
| 4分  | 展開 1        | メソアメリカ<br>アンデス             | 教科書精読を机間巡視                                                 | 教科書の精読<br>疑問点の共有           | 教科書<br>PC or プリント   |
| 8分  | 展開 2        | 問いの表現 1                    | 調べ作業の推奨<br>疑問に対するヒント出し                                     | 疑問点の解決を模索<br>調べの共有         | PC or プリント          |
| 8分  | 展開 3        | 遺跡紹介<br>水の獲得方法<br>マヤ文字、キープ | スライドによる解説<br>環境と水源<br>インカ帝国の領域                             | 解説の理解<br>メモ                | スライド<br>PC or プリント  |
| 15分 | 展開 4        | 問いの表現 2                    | 問いを出し、机間巡視<br>①マヤ文明の特徴は？<br>②インカ帝国の特徴は？<br>③南北アメリカ文明の魅力とは？ | ペアで考え、答えを共有                | PC or プリント<br>※③は宿題 |
| 8分  | まとめ<br>振り返り | 南北アメリカ文明からの学び              | 南北アメリカ文明と他の文明との相違点は？                                       | ゴールシートの記入<br>(字数無制限で考えを書く) | PC                  |

- ・マヤ地域とアンデス地域の自然環境
- ・チチェン=イツァの「ククルカンの降臨」
- ・セノーテとチュルトゥン、貯水池などの水源
- ・マヤ文字とキーブ

#### ・問いの表現 2＝問いの解答の作成

授業で出した問いは、①マヤ文明の特徴は？ と②インカ帝国の特徴は？ である。これを整理する「作業」を行い、ペアで解答を共有する。単なるまとめなので、特に解答例を示さなかった。ただし、生徒たちが解答を作って相互に説明する場面で机間巡視し、問題がありそうな場合はしっかり助言した。これが「個別最適化学び」と「協働的な学び」を一体化した実践である。

なお、③南北アメリカ文明の魅力とは？ については、ツアーコンダクターになりきり、中南米の中で世界遺産の一つ選んでその魅力を書くことを宿題にした。そして、世界遺産の問題点や現代社会に活かせることを論述することも課した。これが「唯一の解答がない深い問い」に相当する。以下は生徒の解答例である。

#### マチュピチュの歴史保護区

マチュピチュは「一度は行きたい世界遺産」で常に上位に選ばれています。標高 2,400m の断崖に建設された都市とされていますが、なぜ造られたのかは宗教施設や身分の高い人々の避暑地など様々な説があるそうです。ケチュア語で「年老いた峰」という意味で、写真は多くの人が見たことがあると思います。当時使われていた橋が絶壁に残っているほか、作物を育てるために建設された段々畑に水路が張りめぐられ、食料を確保するための高い技術があったことがわかります。かわいいアルパカもいるので、一緒に写真を撮ることもできます。遺跡保存のために入場数が制限されているので、事前の予約が必要です。

でも、以前は予約なしに入場料を払えば入れたのに、現在は制限されているのは、観光客が殺到して遺跡が破壊されているのが大きな理由です。観光客は世界遺産を守る義務もあると思います。人気のあるマチュピチュだからこそ、これからも多くの人たちが楽しめるように、遺跡を保存する意識を持ちたいし、そうした教育や情報も広めていくべきだと思います。

#### ・まとめ（振り返り）

「今日のゴール」の自分なりの解答を、Chromebook の Google Classroom に配信してある「ゴールシート」に入力して提出する。この解答は

教科書の本文を整理し、自分で調べたことを書き加えればよいので「作業」にあたる。ただし、このような問いの解答を考えることは入試や定期考査に必要な力となるだろう。

#### 今後の期待と課題

最後に、高校生に期待することと、教員としての課題について述べようと思う。

昨今の授業の傾向として、「思考・判断・表現力」を伸ばすことに重点を置き過ぎて、調べればわかるから覚えなくてもよいとして「知識・技能」をやや軽く扱うように思える。しかし、正確な知識をもとに議論することは当然必要であり、高校生には知識を得ることに貪欲になってほしいと願っている。「知識・技能」と「思考・判断・表現力」は二者択一ではなく、知識をつけながら資料を読み解き、問題点について議論するべきである。

また、下の図のように、「世界史探究」に限らず、すべての教科の授業の基盤には「探究」があるはずである。先述したように、宿題をきっかけに、総合探究の個人研究テーマを古代アメリカ文明に変更して進めている生徒がいる。これは授業を通じて自分で世界遺産について調べ、個人研究に着手した例であり、「世界史探究」が「総合探究」と結びついたことを示している。参考までに、この生徒は歴史系の大学進学を希望しており、授業によって目指す学問への知的好奇心が触発されたと言える。このような高校生が、古代アメリカ文明の授業によって今後も出てくることを期待したい。

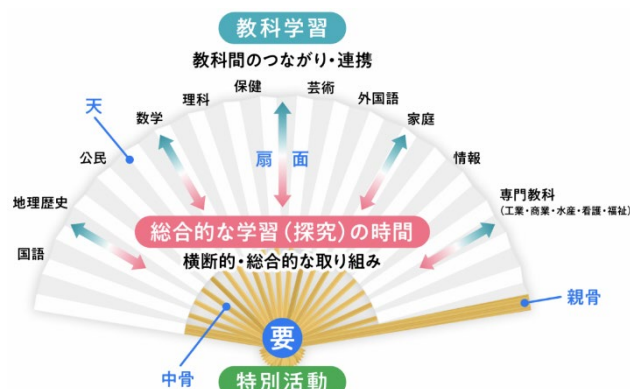


図 教科学習と総合探究と特別活動の関係<sup>iii</sup>

一方、今後の課題としては、調べ学習の際にオンラインサイトを検索してヒットした文言をそのまま

「コピペ」する生徒が多いことである。時間をかけずに課題を提出しようとする余り、内容を吟味せず、生成 AI に頼ったりするケースも見受けられる。サイトや生成 AI はあくまでも参考対象とすべきで、それをもとに自分の頭で考えて整理してほしい。そうした学習が、古代アメリカ文明の新たな発見と更なる関心に繋がるだろう。

---

i 多々良 穰、2025 年、「2025 年度共通テスト 歴史総

---

合・世界史探究 解答・解説」『マヤ夫の世界史授業』  
<https://worldhistorybymayao.blog.fc2.com/blog-entry-393.html> (2025.6.15 閲覧)

ii 多々良 穰、2023 年、「新科目世界史探究における古代アメリカ文明の学び方」『古代アメリカ』26:109-121。

iii 山下真司、2023 年、「あらためて探究とは?」、

VIEW next ONLINE

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article17584/#> (2025.6.15 閲覧)

## ●エクアドル「バルサマラグア考古学レスキュープロジェクト」についての報告

佐藤 剛（エクアドル文化遺産省研究・解釈センター（オハス・ハボンシージョ丘陵））  
エステバン・アコスタ（Esteban Acosta）（ライカ・エロイ・アルファロ大学マナビ校）

### 1. はじめに

「バルサマラグア考古学レスキュープロジェクト（Proyecto de Rescate Arqueológico Balsamaragua）」は、エクアドル国のバルサマラグア遺跡（El Sitio Balsamaragua。以下、遺跡）（図1）が「潮汐と風雨により浸食され（自然的影響）、盗掘者（ウアケロス Huaqueros）からの被害を受けている（人的影響）ため、考古学的に緊急調査を行い、遺跡情報と発見資料について研究と分析、公開を行うこと」を目的として、遺跡の管理者である文化遺産省（El Instituto Nacional de Patrimonio Cultural。以下、INPC）第4区域研究・解釈センター（オハス・ハボンシージョ丘陵）（El centro de investigación e interpretación Zonal 4 del Instituto Nacional de Patrimonio Cultural- Cello Hojas-Jaboncillo。以下、センター）が主体となり実施したプロジェクトである。

2010年に、ビクトリア・ドミンゲス氏（Victoria Domínguez）とバレンティナ・マルチネス氏（Valentina Martínez）はマナビ（Manabí）県を中心とする沿岸部の遺跡の広域的な分布調査を行っている。その成果によれば、遺跡は沿岸部の中央、マナビ県ハラミホ（Jaramijó）郡バルサマラグアに所在する。遺跡は、海浜に面する海拔約4mの段丘上に位置し、面積は約560,000 m<sup>2</sup>の大規模なものである。遺跡の文化的な帰属は、沿岸部地域の地域開発期のバイーア文化（Cultura Bahía. AD1前後～AD500）から地域統合期のマンテーニョ文化（Cultura Manteños. AD500～AD1532）である [Domínguez y Martínez 2010]。

またドミンゲス氏とマリア・パトリシア・オルドニェス氏（María Patricia Ordoñez）は、2019年に同じハラミホ郡の近隣にあるラ・イスラ遺跡（El Sitio La Isla）において、同様の緊急介入により墓域の調査を行い、葬儀と家庭の文脈について述べている [Domínguez y Ordoñez 2024]。

本稿では、考古学的な救助による緊急発掘調査

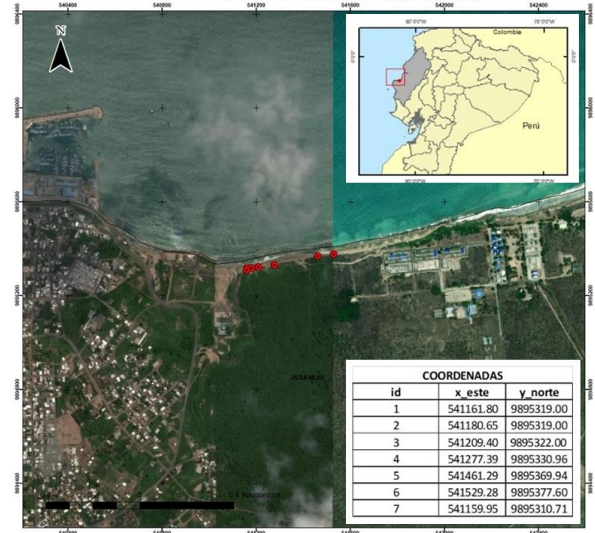


図1 遺跡の位置

を行った考古学者エステバン・アコスタ氏の見解を基盤としながら「バルサマラグア考古学レスキュープロジェクト」についての報告を行う。

### 2. プロジェクトの経緯

2023年12月に、遺跡が潮汐と風雨の影響により大規模に浸食された、との情報がINPC第4区域に寄せられた。遺跡は海浜に面しており、これまでも潮汐と風雨で浸食され、盗掘による被害が横行していたため、崩落などにより散乱した出土品（遺物）などの資料の散逸が懸念された。そのため、INPC第4区域と海軍基地、ハラミホ郡自治政府の3者が2024年2月に協議し、海軍基地とハラミホ郡自治政府の協力を得て、INPCが「バルサマラグア考古学レスキュープロジェクト」により、緊急調査による救助を実施することとなった。

現地での発掘調査は、特に浸食の激しい地点について、同年2月26日から3月7日に、センターの考古学者アコスタ氏（当時）と職員2名の協力者が行った。この救助は予定通りに行われ、無事に終了した。

同年3月12日、センターの管理するオハス・ハボンシージョ丘陵考古学博物館（El Museo

Arqueológico Cello de Hojas Jaboncillo。以下、博物館)に JICA (ジャイカ) 海外協力隊ボランティア隊員の学芸員として、考古学研究者の佐藤が赴任した。佐藤は赴任後に、資金不足などにより継続が危ぶまれていたこのプロジェクトの存在を知った。そのため、センターの所長で佐藤のカウンターパート (CP。隊員と協働する同僚) でもあったヘラルド・カストロ (Heraldo Castro) 館長 (当時。兼任) とアコスタ氏、佐藤との 3 者で、JICA エクアドル事務所にも協力をしていただきながら、プロジェクトの進行について話し合いを続けた。同年 5 月には所長が交代し、新しく所長に就任したアンドレス・リベラ・ゴベア (Andrés Rivera Govea) 館長 (兼任) からも協力が得られることになった。同年 8 月、センターと JICA 職員、佐藤との打ち合わせにおいて、このプロジェクトを佐藤の JICA におけるボランティア活動のメインとして、協力しながら進めていくことに合意した。

### 3. 「墓 1」の考古学的な発掘調査

ここでは、特に浸食の激しい地点について行った、考古学的な発掘調査の予備的な結果に基づき、記載する。調査は現在も継続していることから、記載内容は、研究の最終的な報告書が優先されることを明記する。

遺跡に設定した調査区画は崖の浸食が特に著しい場所である。調査区域は崖面に竪穴状の落ち込みが観察され、多数の人骨が露出していた場所であり、その上部に  $2 \times 1 = 2 \text{ m}^2$  の範囲で設定した。

「墓 1」(写真 1) は地表下 0.45m で、半楕円形の黒褐色砂の落ち込みを確認した。区画の南側では墓の可能性のある落ち込み (「特性 2」として記録) を確認した。墓 1 は鐘形 (フラスコ状) の竪穴墓のため、残存部を掘り進め、坑底近くで複数体の人骨を確認した。大きさは確認面で約  $0.70\text{m} \times 0.40 \text{ m}$  (残存)、深さ約 0.80 m である。

調査者のアコスタ氏によれば、人骨は、墓の内部には 7 体分を確認し、一次埋葬と認識できるそうである。その頭蓋骨や他の部位の骨の残存状況からは、成人と考えられる 4 体、幼児または青年 (女性) 3 体が含まれていた。また、崩落した可能性が高い成人の頭蓋骨 1 体分を救助している。出土した骨には明瞭な被熱の痕跡は無いが、覆土には炭化物粒が多く含まれる。



写真 1 墓 1 の人骨出土状況

残存部分に副葬品は無い。供献品は、墓の上部に真珠貝と魚のヒレの骨が土器の破片の上に置かれる<sup>(註1)</sup>。

### 4. 展示会「終の棲家 (ÚLTIMO MORADA)」

このプロジェクトの一環として、博物館では 2024 年 10 月 31 日から 12 月 2 日の期間に、遺跡が所属するマンテーニョ文化と、その初期に日本列島で併行する古墳文化についての比較文化の展示会「終の棲家 (ÚLTIMO MORADA)」を開催した (写真 2)。なお、展示会はそのまま継続し、2025 年 4 月 6 日まで展示を続けた。

展示会はオハス・ハボンシージョ丘陵考古学博物館展示室の二番目に広いスペース (出口手前の展示室) を使用し、その一部を改変して行った。展示は、地域住民や来館者に自国文化と諸国の文化の多様性への理解、異文化への理解を促進すること (社会化) を目的として、エクアドルのマンテーニョ文化と、同時期の古墳文化の文化比較である。展示内容はリベラ館長の主導のもと、草案はアコスタ氏と佐藤が中心となり作成し、実際の展示作業は、センターの技術チームとしてアコスタ氏と修復家で博物館学者リズベス・チョンタシ氏 (Lizbeth Chontasi)、人類学者ギセラ・ムニ

ヨス氏 (Gissera Muños)、建築家フェルナンド・ザンブラーノ氏 (Fernando Zambrano)、博物館職員エルネスト・ピン氏 (Ernesto Pin)、佐藤の6名が行った。

資料の比較を目的とした展示の構成では、(1) それぞれの文化で同様の文脈で用いられたと考えられる資料を隣同士に設置して行う方法や (2) 比較する資料全体の展示の構成を類似させ見学者のイメージにより比較してもらう方法などが考えられる。今回の展示の構成では可能な限り

(2) の方法を用いたが、従来の展示室と展示品をそのまま利用しているため、一部では整合的ではなかった。このことについては、博物館には専門のガイド2名が所属しているため、ガイドによる解説で補った。

特に日本列島における文化の多様性については、同時期に、北海道島における yubeot (ユベオツ・続縄文。aynu 語) 文化 [佐藤 2021] と南西諸島における貝塚文化、それらを除く列島の中部地域 (本州列島) に位置する古墳文化の3つの異なる文化があることを地図で示し、地域的な違いがみられることを強調した。

## 5. 資料整理と分析

資料整理は、2024 年 12 月から主に、出土品 (遺物) の写真撮影とデータベース化を行った。撮影とデータベース化はクリーニング前の袋ごとに行っており、出土した状態での出土品 (遺物) 管理のためである。なお、2025 年は 3 月から 5 月現在まで、出土品 (遺物) のクリーニングを継続して行っている。

分析は自然科学により、2025 年からエクアドル国内での人骨の形質人類学による分析、土器分析、炭化物による  $^{14}\text{C}$  年代測定などを予定している。今後、人骨については日本の研究者により DNA 分析を行う予定であり、実現すれば、エクアドルの古人骨による初めての分析例となることが期待されている。

## 6. 今後の展望

2024 年にバルサマラグア遺跡で調査した墓 1 は、エクアドル沿岸部における墓としては、形状や供献品などは、これまでに知られているようなごく一般的なものである。しかし、エクアドルにおいて、これまでに考古学または文献との比較、



写真 2 展示会の様子

(上:古墳文化、下:マンテーニョ文化)

形質人類学により古代の墓の人骨資料は検討されてきているが、DNA 分析を行うのは初の試みとなる。考古学と自然科学の DNA 分析との学際的な協働により、エクアドル沿岸部の古代の人々の多様性、同一墓内に埋葬された複数の遺体の血縁関係および親族構造などの理解がこれまで以上に進むだろう。また、現代のエクアドルにおける先住民や人々の地域的な多様性についても、より一層の理解の一助になることを期待できる。

2025 年は、INPC 第 4 区域の承認のもと、センターにより「バルサマラグア研究プロジェクト 2025」として継続して研究が進められている。5 月には墓の可能性のある「特性 2」について、さらなる考古学的な発掘調査を行った<sup>(註2)</sup>。これらのプロジェクトが実を結び、その成果がエクアドルや地域コミュニティに還元されるには、まだ多くの課題が残されているが、実現に向けて、より一層の努力を行っていききたい。

また、さまざまな理由により資金が不足してい

るため、日本国内の研究機関などにはご支援をお願いしたいと思います。心より皆様からのご支援をお待ちしております。

### 謝辞

2024 年の資金協力は INPC と土地所有者であるエクアドル海軍基地、所在地であるハラミホ州自治政府によって行われた。2025 年は INPC と JICA エクアドルにより、資金協力が行われた。関係機関によるご理解とご協力に対して、記して感謝いたします。また、様々なご指導とご理解を求めた INPC 第 4 区域技術ディレクターのマヌエル・バルシア氏 (Manuel Barcia)、センター所長のリベラ氏、INPC のチーム全体、センターを離れたカストロ氏と同僚のすべてのみなさまにも、感謝を表します。

### 参考文献

Domínguez, Victoria y Martínez, Valentina (2010) *PROYECTO: DELIMITACIÓN ARQUEOLÓGICA e INVESTIGACIÓN ETNOHISTÓRICA DE JARAMIJÓ, CANTON JARAMIJÓ, PROVINCIA DE MANABÍ*. INPC Zonal 4, Manabí

Domínguez, Victoria y Ordoñez, María Patricia (2024)

*CONTEXTOS FUNERARIOS Y DOMÉSTICOS EN EL SITIO ARQUEOLÓGICO LA ISLA, ECUADOR*

佐藤 剛 (2021)「ユベオツ (続縄文) 時代の概説」『第 41 回南北海道情報交換会発表資料』 pp.1-35、南北海道考古学情報交換会、

[https://ishiijunpei.github.io/dkouko2020/report/sato\\_u/merge.pdf](https://ishiijunpei.github.io/dkouko2020/report/sato_u/merge.pdf)

註 1 すべての調査者のアコスタ氏による見解。佐藤は

写真 1 を見る限り、人骨の出土状態は、頭蓋骨と四肢骨は形態学的、解剖学的な位置を示しておらず、四肢骨は長軸をそろえた状態でまとまっており、胴体 (トルソー) 部分の人骨は一部のみしか出土していない、と考える。それ以外の人骨の出土した時の写真をすべて確認したが、それらの写真においても、写真 1 と同様の状況などであった。また、これまでの調査での経験からは、残存部分の計測値だとしても、約 0.70m×0.40m (残存)、深さ約 80 cm の土坑に、最小で 7 体の人物 (大人を含む) が、一次埋葬として、その内部に埋葬されたと考えることは出来なかった。これらのことから、佐藤は二次埋葬の可能性が高い、と考えている。両者の見解は異なっている。土坑の形状や人骨の出土状態などの図面類の作成や形質人類学的な調査は終了しておらず、現段階では最終的な報告書は作成されていないため、両論を併記した。

註 2 この調査の結果、墓の可能性のある「特性 2」は住居の一部であることを確認し、新たな成果が得られた。機会があれば、今後に更なる報告などを行いたい。

※なお、JICA 世界日記と JICA 北海道現地レポートで博物館での活動を公開していますので、そちらも見て頂けるととてもうれしく思います。

JICA 世界日記

[https://world-diary.jica.go.jp/JICA\\_Ecuador/activity/no\\_22.php](https://world-diary.jica.go.jp/JICA_Ecuador/activity/no_22.php)

JICA 北海道現地レポート

<https://www.jica.go.jp/domestic/sapporo/activities/volunteer/report/32.html>

●『メソアメリカ文明ガイドブック』

(市川 彰、新泉社、2023 年 7 月、1800 円＋税)

市川 彰 (国立民族学博物館)



写真 1 表紙と裏表紙

本書は、シリーズ『古代文明を学ぶ』の第一弾として新泉社から出版された。同社は、国内の遺跡を紹介する「遺跡を学ぶ」シリーズで有名であり、その海外版と位置付けることができるだろう。2025 年 5 月時点で、メソアメリカ、インダス、古代オリエント、アンデスが刊行されている。今後は、古代メソポタミア、古代エジプト、古代中国、古代朝鮮半島、古代東南アジアが刊行予定である。手ごろな値段で図版も豊富な本シリーズは、世界の古代文明に関する入門書として多くの方に手に取っていただきたいものである。

本シリーズの特徴は、各文明のエッセンスを 20 前後の項目で伝えようとする点にあるだろう。一項目が、見開き 2 頁の文章＋見開き 2 頁の図版がセットとなっている。古代アメリカ学会員の皆さんはすでにご存じのように、メソアメリカ文明は極めて多様であり、20 前後の項目で隅々を網羅することは不可能である。したがって、項目選びにはとにかく苦慮した。あれがない、これがないなどの意見があることは承知しているが、ご容赦いただきたい。さらに、本書の依頼を受けた時点ですでに多くのメソアメリカ文明に関連する一般書が日本語で出版されており、それらとどのように差別化をはかるかということにも大いに悩まされた。それでも本書では、メソアメリカ文明のなかでも、筆者が特に伝えたいという項目や図版を選んだつもり

である。

構成としては、項目の 1・2 が導入部で、メソアメリカ文明の特徴と自然環境について説明している。大学で授業をすると「メソアメリカ文明」が一枚岩の均質な文明というイメージが持たれていることに気づく。そのため、豊かな自然環境において多様な文化や社会が築かれたことを強調しようと意識した。続く 3 から 13 の項目にかけては、人類がベーリング海峡をわたりアメリカ大陸中に拡散するところから、16 世紀初頭にスペイン人がやってくるところまで、いわゆる通史を把握できるような構成にした。農耕の始まり、都市の誕生などその他の文明との比較においても画期となる出来事を選んだつもりである。

上述したようにメソアメリカ文明は多様である。したがって、各項目で取り上げる内容について、地域や時代をまんべんなく文章・図版の合計 4 頁でまとめることは容易ではなかった。意識したことは、すでにほかの著書で触れられている内容や遺跡だけではなく、執筆時点での最新の調査研究動向や、他の書籍であまり触れられていない遺跡の記述や図版を挿入することであった。例えば、「7 最初の都市ができるまで」では、モンテ・アルバンについて取り上げた。日本語の書籍では、テオティワカンやマヤの諸都市に関する情報は多いが、サポテカに関する情報については、アップデートが限られているからである。

項目の 14 以降は、より個別的なテーマとなっている。これについても紹介したかったことが多く、テーマの選定には悩まされた。個人的には、最後の 2 つの項目「20 メソアメリカ考古学研究と日本人」「21 発掘・修復保存・博物館活動」が、これまでの日本語書籍では紹介しきれてこなかった部分ではないかと思っている。筆者は、過去にもメソアメリカ文明研究における日本人研究者の動向をまとめている (市川 2014 など)。それを凝縮したのが、この 2 項

目である。もちろんすべての調査研究を網羅的に紹介できているわけではないが、日本人によるメソアメリカ文明研究の歴史や内容が専門家以外の方にも伝わるようにところがたつもりである。

それから巻末付録として、「日本と関係の深いメソアメリカ文明を研究する現地の大学」「一度は訪ねてみたいメソアメリカ文明を知るための博物館」を追加した点も個人的には本書のポイントであると思っている。当初は、それぞれ1項目として取り上げたいと思っていたが、紙幅の関係で巻末付録となった。日本人研究者が学んできた大学や、日本の機関が協定などを結び共同研究を進めている機関を各国のバランスを考慮しながら選定した。これについても全ての機関を紹介できているわけではない。また、関連する国内外の学会やシンポジウムの小さな紹介も付録に含めた。こうした大学や博物館、学会・シンポジウムの情報を記載した理由は、これからメソアメリカ文明を知りたい・学びたいという方々への情報提供という意味合いが強い。日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画（旧・日墨交流計画）など海外留学するための奨学金についても紹介したかったが、紙面を割くことができなかった点はやや悔やまれるところである。

本書がシリーズ『古代文明を学ぶ』の第一弾として出版された背景には、2023年6月から東京で開催された特別展「古代メキシコマヤ、アステカ、テオティワカン」にあわせて出版したいという新泉社からの要望があった。執筆を本格的に始めてから、出版までかなりタイトなスケジュールであったと記憶している。幸か不幸かコロナ禍の影響もあり、執筆の時間が多分にあったことが良かったともいえる。展示を訪れた知人や、金沢のアパートの1階にある蕎麦屋の店主が購入（サインを求められた）しており、ある程度、開催にあわせて出版した効果がでていて、うれしい限りである。

先にも述べたように、この数年、学会員の皆様のご尽力もあり、メソアメリカ文明関連の書籍が立て続けに国内で出版されている。そういった書籍と差別化を図るために、筆者自身の調査成果を織り交ぜればよいのかもしれないが、

それでは玄人向けの内容になってしまうし、かといって、どの書籍にも書いてあるような内容を紹介するだけでは、意味がない。想定読者の要望や興味などを考えつつ、入門書としてどのような内容を盛り込むべきか。本書を執筆するにあたって再度、日本語文献を渉猟し、どのような内容が書いてあるのか、または書いていないのか、さまざまな欧文文献と読み比べて熟考した内容が本書である。熟考した結果がこの程度かと思われる方もいるかもしれないが、それはひとえに筆者の能力のなさである。個人的には色々な地域や時代の情報をアップデートできた点は良かったと思っている。

出版社とのやり取りの中で印象に残っていることがある。書く方としては、限られた紙幅のなかで可能な限り多くの情報を載せたいと思うのが世の常ではなかろうか。多分に漏れず見開き2頁にこれでもかという量の図版とキャプションを当初は盛り込んだ。しかし、出版社の担当者から「途中で読者の目を休ませることも必要ですよ」との進言を受けた。目からうろこであった。図版をただ並べるのではなく、うまく背景や余白を残し、項目によっては図版の数を最小限にすることも読者に本を気持ちよく読んでもらう工夫のひとつであるという。確かに、研究費獲得のための申請書や我々が学生に課すレポートにおいても「見た目」というのが重要であると感じることがある。文章が良く書いていても、お気に入りの図版をとことせましと並べてみたところで、それはあくまで作る側の満足でしかなく、読む側のことを考えなければならぬことを痛感した。本を「書く」というよりも「デザインする」という思考について気づかされた。内容やストーリーももちろん重要だが、人々に読んでもらう、興味をもってもらい、そして楽しんでもらうためにはどうしたらよいのか。それは、本の執筆に限らず、アカデミア全体の課題なのかもしれない。

最後にはなるが、本書への写真提供のご協力をいただいた学会員の皆様には深く感謝申し上げます。

#### 参考文献

市川 彰 2014「メソアメリカ考古学における日本人研究者」『京都ラテンアメリカ研究紀要』14: 51-72。

## ●『アンデス文明ガイドブック』

(松本雄一著、新泉社、2025年1月刊、全94ページ、1800円＋税)

松本 雄一 (国立民族学博物館)



写真1 表紙と裏表紙

2021年の夏、緊急事態宣言という言葉を読んだところで聞くような時期だったと記憶している。私は病院の駐車場でひたすら祈っていた。妻を妊婦検診に連れて行ったところ、急遽出産予定を早めて帝王切開手術を行うこととなり、あたふたと入院準備を整えて戻ったところであったのだ。コロナ禍のさなかにあって付き添いは認められず、駐車場で今か今かと知らせの電話を待っていたのである。ひたすらスマホの画面を見つめていると、懐かしい人物からメールが来た。東京大学考古学研究室で学部・修士から博士課程の半ばまでの長い間を共に過ごした、東京文化財研究所研究員の安倍雅史氏からであった。当時すでに多数の論文と著書を出版し活躍の場を国際的に広げていた安倍氏からの連絡は久しぶりで、通常であれば何事かと喜んでメールを開くところであろう。しかしその時の私は通常の状態ではなかったと思う。何かが切れて病院の受付に走って向かい、子供が無事に生まれたかを教えてくださいと受付でお願いした。看護師さんが優しく対応して下さり、病室とわざわざ連絡をとって母子ともに健康ですと教えてくれたが、なにか適当に返事をした後のことは記憶にない。気が付くと駐車場でぼーとしていた。付き添いも何もできないのだから後は帰って寝るしかなかったのである。そこでふと安倍氏からメールが来ていたことを思い出して確認してみた。そのメールが新泉社シリーズ「ビジュアル版古代文明を学ぶ」の企画とその中の一冊となる本書の執筆依頼であった。

長々と私事を書き連ねてしまったが、このような経緯で執筆した本書は、初学者向けのアン

デス文明の概説書である。「ビジュアル版」というシリーズのコンセプト通りに豊富なカラー写真と図版を収録し、少ないページ数の中ではあるが、神殿の出現からインカ帝国の滅亡に至るまでのアンデス文明の展開が一つの流れとして理解できるように執筆したつもりである。

通常のタイミングで受けていたのであればおそらく断っていた依頼である。なにせこの分野の概説書としては本学会の関雄二会員が執筆し、1997年以来すでにいくつもの版を重ねている『アンデスの考古学』(同成社)が存在する。その前に出版された代表的なモノといえば、故泉靖一東京大学教授による『インカ帝国: 砂漠と高山の文明』(1959年 岩波新書)までさかのぼるのではないだろうか。研究者として年を重ねるにつれ、概説書の執筆には前提となる膨大な読書量と、それを一つの流れにまとめあげるいわばセンスが必要であることが理解できるようになった。そしてその結果、どこかで自分には無理だと結論付けていたのである。しかし今回に限っては、これも何かの縁であろうというタイミングであり、即答で承知してしまった。

安倍氏が新泉社の編集の方々と練り上げた、「読みやすく、豊富な写真と図版を軸として、世界各地の古代文明のそれぞれの全体像を一冊ずつにまとめる」というシリーズコンセプトは、確かにこれまでの日本語の出版物には例がないもので極めて魅力的であった。しかし、一般の人も手に取りやすい分量でアンデス文明の全体像を描写するというのは筆者にとって予想以上に困難であったのも事実である。そしてその多くは、筆者の無知に起因するところが大であった。自身が専門とする形成期中・後期(紀元前1200～前250年)以外の時代に関する知識が恐ろしいほど薄いことに否応にも気づかされたのである。つまりここで筆者に課されたタスクは、①アンデス考古学の全体像を把握するための文献を渉猟し、②その知識を前提としたうえでそれぞれの時代のエッセンスを抽出した分かりやすい文章を書く、というものであった。概説書を描くのであれば、①の部分は普通クリアして

いる状態で引き受けるべきなのだろう。気づくのが遅かったが、もう逃げられない。海外で近年出版された文献を改めてチェックし、大学院生のころの教科書を引っ張り出して勉強しなおすことから始めた。引き受けてから一年は、時間を見つけては個々の地域、時代の文献を読むことに時間を費やしていたが、書き始めているのだからいつまでたっても書き終わらないという当たり前のことに気がついた。今思うと逃げていたのだと思う。書き始めてみると今度は、限られた字数に十分な情報を盛り込むことができないことに頭を悩ませるようになる。体感だが、読んだ文献の1割ほどしか直接文章に反映させられないのだ。ただ全体を知らねば情報の取捨選択はできない。それぞれの時代に関する記述は何度も書き直す必要があった。参考にした文献を末尾に記したが、実際に読んだ量はおそらくはその数倍をはるかに超えるはずである。つらい作業ではあったが、気づくと自分なりにアンデス文明の全体像を構築し、専門とする研究をその中に位置づけることができるようになっていた。

何とか文章の目処がついてくると今度は写真と図版が問題となってきた。見開きのテキストと見開きのビジュアルとで4ページがセットとなるという構成上、写真はテキストに対応し、インパクトのあるものを厳選せねばならない。筆者が撮影した写真などたかが知れているため、あらゆるコネクションを使って写真の使用許可をお願いした。日本においてアンデス文明に興味を持ってくれる一般の読者層を対象としていること、最新の研究を紹介したいこと、そして若手研究者の育成に対する寄与を意図していると本気で伝えたことが功を奏したのか、国内外の研究機関や研究者の方々が驚くほど親切に協力してくださった。ありがたいことに、半世紀以上前の貴重なモノクロ写真から現在進行中の新たな調査写真に至るまで貴重な写真や図版を豊富に収録することができた。実は本書には、日本ではまだ他に発表されていない写真がいくつも収録されているのだ。そして、これだけ貴重な写真を使わせていただけるのであれば、ということで文章自体の書き直しも進めた。結果として、限られた文字数の中で定説の部分と最

新の成果をギリギリのバランスで盛り込むことができたと思っている。

一方で本書には、アンデス文明の全体像を描き出すという本来の目的を損なわない形で、筆者の専門性も反映されている。やはり日本のアンデス研究において研究者の層が最も厚いのは形成期（紀元前3000年-紀元前後）であり、その成果は十分に盛り込むべきであろうと考えた。そのため、他国の概説書と比較しても形成期に関する記述の割合は多くなっている。そして、日本ではあまり体系的に紹介されていないマンチャイ文化に関する独立した記述を組み込んだ。筆者の大学院時代の指導教員であるリチャード・バーガー博士が進めてきたこの文化の研究は、日本人研究者による形成期研究との比較対象として極めて重要であると考えたためである。

また、最後の二つのセクションは日本人研究者によるアンデス文明調査の歴史と現状に焦点が当てられている。これによって、若い世代の読者に、アンデス考古学という分野が日本において長い歴史とともに根付いていること、アンデスの様々な地域で日本人による現在進行形の調査が行われていることを示しておきたかったのだ。さらに全体として本書では、日本人による研究成果を積極的に紹介するように努めた。執筆の最後の時期に入ってから編集の方に無理を言い、研究者の名前とその所属機関を文章の中に組み込むことをお許しいただいた。これは筆者が施したささやかな「仕掛け」ともいえるべきもので、興味を持った読者が自分の進路を考える際に、アンデス考古学を学ぶことができる場所をすぐに調べたり問い合わせたりできるようにするための措置である。昨今の社会情勢の中、研究者を目指す若者の数は減少し続けていると聞く。我々が古代アメリカ学会においても次世代研究者の育成は大きな課題と認識されており、様々な試みが行われているし、これからも行われていくだろう。本書は高校生以上であれば理解できるように執筆したつもりである。本書がきっかけとなって、教育研究機関に所属する会員の研究室を訪ねたり、本学会のイベントに参加したりする若者が現れてほしい、そして研究者を目指してほしいと願ってやまない。

## ●『マウンド・ビルディングの考古学 ― 先史アンデスにおけるモニュメントのはじまりを問い直す』

(荘司一步著、臨川書店、2024 年 12 月、18,000 円＋税)

荘司 一步 (山形大学)

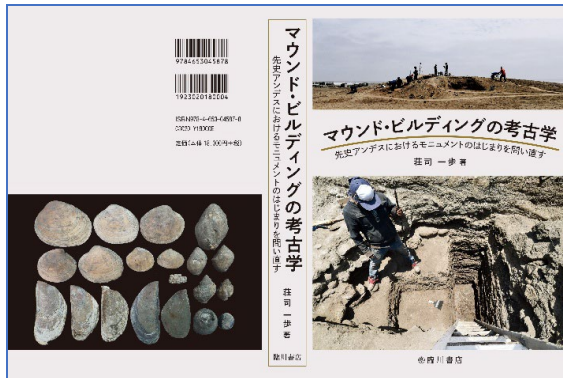


写真 1 表紙と裏表紙

本書は、アンデス文明史において初期モニュメントが生み出されてきた過程を、「マウンド」と呼ばれる古期（5000～3000BC）の小規模な盛土遺構の形成過程から論じた学術書である。著者は、ペルー北海岸に位置するクルス・ベルデ遺跡の考古学的発掘調査と出土遺物の詳細な分析、生態学的な知見を用いた動物考古学的分析、地球化学と生物学および考古学の学際的な手法であるスクレロクロノロジー（硬組織編年学）を用いた古環境解析によって、400 年近く継続された日常的な生活残滓の廃棄行為が当該地域におけるモニュメントの創出へと帰結するプロセスを描き出した。

本書は、2021 年に総合研究大学院大学に提出した博士学位論文『先史アンデス古期におけるマウンド形成の考古学的研究——クルス・ベルデ遺跡における環境変動と集団的実践の変化』を加筆・修正してまとめたものである。加筆と修正の主な目的は、本書をクルス・ベルデ遺跡の考古学データを報告するモノグラフとして位置付けること、そして、博士学位論文で議論した公共建造物の出現過程をモニュメンタリティの形成過程へと昇華して整理し直すことであった。そのため、博士学位論文から章立てを大きく組み替えるとともに、マウンド形成に参加した集団の社会的記憶を生み出す社会实践として「マウンド・ビルディング」を位置づけ、モニュメンタリティの問題を正面切って考察する形で議論を深めている。

著者の考える本書刊行の意義は大きく 3 点挙げられる。第一に、本書が近年のアンデス考古学において焦点の当てられることが少なかった古期という時代を対象としたものであることだ。アンデス文明史の構築に大きな貢献を果たしてきた日本のアンデス調査団をはじめ、初期の文明形成過程に関する研究で大きく取り上げられてきたのは、神殿建築と呼ばれる公共祭祀建造物が建設され始める形成期（3000～500BC）であり、調査研究の進展具合においても、それ以前の時代と比べて大きな開きがある。これは、サブシステンス・エコノミーに偏重するようなかつての研究が乗り越えられてきた研究状況にも起因することであるが、研究の進む形成期社会を正当に位置づけるためにも、それ以前の社会との連続性や断絶の検証および比較は重要な作業となる。本書は、形成期というある種華々しい時代の前夜としての古期に着目しながら、調査の停滞する当該期の重要性を改めて論じたという意味で大きな意義を持つ。

第二に、長くアンデス考古学の主題となってきたモニュメント研究が直面する課題を、人類的な理論研究の蓄積をもとに本書が乗り越えようとしている点にも意義を認められる。神殿建築をはじめとするモニュメントの「はじまり」を追い求める研究が隆盛しているのに反して、その創出過程は不明確なままである。その背景として、モニュメントであるか否かの基準を建築物の大きさや特徴に求めてきたモニュメント観の存在を見出し、社会实践を通じて生成される社会的記憶という質的なモニュメンタリティに着目して、モニュメントの創出過程を問い直す重要性が本書で示されている。その中で本書が目指すのは、日常的な資源利用の中で絶えず生じる廃棄行為である。クルス・ベルデ遺跡では、廃棄物を集積しながら建設活動などで手を加え、埋葬行為がマウンドへと関連付けられていく。廃棄と建設が一体となったマウンド・ビルディングという社会实践がマウンドのモニュメンタリティを生み出すことで、モニュメン

トが創出されていく様子が本書で明らかになった。さらに著者は、同じくモニュメントを生み出す神殿更新という実践と比較しながら、アンデス文明史におけるモニュメントの創出と廃棄行為の関係性を考察した。加えて、同種のマウンド・ビルディングの事例が世界中の先史時代に認められることを指摘し、人類史におけるモニュメントの創出まで議論の射程に収めようとしている。こうした本書の議論は、古期のクルス・ベルデ遺跡の事例をアンデス文明史、そして人類史へと拡張していくものであり、日本の貝塚研究や廃棄物をめぐる人類学的研究を含め、アンデス考古学に留まらず人類学的な意義を本書が有していることを意味する。

三つ目の意義として、本書がクルス・ベルデ遺跡の基礎的な考古学データを多角的に分析し、学際研究を通して考古遺物からデータを引き出している点が挙げられる。古環境分析の手法としての二枚貝のスクレロクロノロジーは、考古学への応用がまだ少ない分野であるだけでなく、そうした手法を考古学データに落とし込み、マウンドの遺跡形成論にも応用している。スクレロクロノロジーの持つ可能性がここに示されるとともに、高度に統合された学際研究のモデルとしても多くの研究の参照点となることが期待される。

本書は、序章と終章を含む全9章で構成されている。構成は以下の通りである。

序章：アンデスにおけるモニュメントとモニュメンタリティ

第1章：アンデスの自然環境と歴史

第2章：クルス・ベルデ遺跡の発掘：遺跡の形成過程と年代

第3章：出土遺物の分析：モノのライフヒストリーと廃棄行為

第4章：食糧残滓からたどる資源利用

第5章：二枚貝のスクレロクロノロジー：古環境変動を探る

第6章：環境変動に伴う社会实践の変容とマウンド

第7章：チカマ川流域沿岸部におけるクルス・ベルデ遺跡

終章：アンデス文明史におけるマウンドと神殿

序章では、先史時代のモニュメントに関するこれまでの研究の問題点を整理し、それを打開するための理論と方策について人類学的な視点を交えて議論している。これまで、建造物の巨大さや荘厳さなどの建築特徴に「モニュメントらしさ」を求めてきた考古学研究に警鐘を鳴らし、集団の社会的記憶を物質あるいは場に結び付けて構築していくような社会实践に着目してモニュメンタリティの生成過程を読み解く研究の必要性を指摘した。

第2章から第5章にかけて調査データや分析結果をまとめ、マウンドが反復的な廃棄行為を通じて形成されてきたこと、エル・ニーニョ現象の規模と頻度が増加するような環境変動があったこと、そしてそれを契機に資源利用とマウンド形成の諸実践に変化が生じていくことを明らかにした。第6章と第7章では、これまでの調査・分析結果を総合して考察が加えられている。これにより、環境変動への適応による資源利用の再編が同一河川流域内に点在する集団間の関係や集団内での協働に変化をもたらしたことで、廃棄物の山であったマウンドへの認識が変化し、モニュメントとしての性格を帯びていく様子が明らかになる。マウンドには視認性を担保するような建設活動が加えられ、埋葬遺体が関連づけられるようになっていった。すなわち、日々の資源利用や集団の記憶が廃棄物や埋葬遺体を通じてマウンドとして結び付けられていったのであり、廃棄と建設が一体となったマウンド・ビルディングという社会实践が先史アンデスにおいてモニュメントを生み出す原動力となったと結論づけた。

以上が本書の内容である。学術書であるために専門的な内容になっているほか、やや価格設定が高くなっているものの、多くの方に手に取っていただきたいと思える書籍を刊行することができた。仮説ともいえる議論も多く含んでおり、本書から新たな議論の広がり生まれることを期待したい。

## ●『考古学者だけど、発掘が出来ません。多忙すぎる日常』

(青山和夫、大城道則、角道亮介著、ポプラ社、2025年2月刊、1600円＋税)

青山 和夫(茨城大学)



写真1 表紙と裏表紙

蛍光カラーの奇抜な表紙の本書は、専門的な研究書ではない。アフリカ大陸(エジプト文明、大城)、アジア大陸(中国文明、角道)とアメリカ大陸(マヤ文明、青山)という三大陸で調査研究する考古学者が、実際に経験してきた出来事や多忙な日々を集めた楽しい読み物(一般書)である。海外の考古学調査では嬉しいことや胸が躍るような新発見がある一方で、日本では考えられないような過酷で、時には命の危険にさらされる野外調査も乗り越えなければならない。圧倒的大多数の日本人考古学者は、日本考古学を専門とするので、外国考古学者の話はそれなりに希少価値があるだろう。

世間では、映画インディ・ジョーンズで外国考古学者に憧れる方がいたり、あるいは私たちが毎日好きな研究だけをしていると勘違いされたりする節がある。大学教員の間では当たり前のことであるが、私たちは「飯の種」として講義や学生指導、大学の数多くの会議や各種委員会、入試業務、研究費申請書の作成・提出、学会関連の業務、アウトリーチ活動等、いろんなことでとにかく忙しい。目次は、以下の通りである。

はじめに 大城道則

《エジプト考古学者の多忙すぎる日常／大城道則》

- ・エジプト人を相手にちょっとアラビア語をしゃべってみる
- ・行列ができる考古学者の進路相談室
- ・ポンペイで体重が5キロ増えた話
- ・君は車道を疾走するラクダを見たことがあるか?

・死ぬ気で勉強してヒエログリフを習得するも、仕事がない

・超大物考古学者の来校

・恐るべき弾丸ツアーのエジプト強行軍

・世界各地の博物館・美術館をダッシュで梯子する

エジプトの発掘道具 考古学者ならば誰もが持つ必須アイテム

《中国考古学者の多忙すぎる日常／角道亮介》

・発掘現場に休日は来ない

《メキシコ・中米マヤ文明考古学者の多忙な日々／青山和夫》

・ジャングルで黒い物体に追われ、ジャガーの足跡に遭遇—グアテマラ共和国にあるアグアテカ遺跡の多忙な日々

・朝昼は発掘調査、夜は英語やスペイン語の研究書を読みふける—ホンジュラス共和国のラ・エントラダ地域の多忙な日々

・大学院生をしながら家庭を築く—アメリカとホンジュラスのコパン遺跡の多忙な日々

・老眼になり、最新の高額機材をフル活用—グアテマラ共和国のセイバル遺跡の多忙な日々

・石器分析が忙しすぎて、発掘する時間がない—メキシコ合衆国のアグアダ・フェニックス遺跡の多忙な日々

・石器の沼にハマリ、世界記録を更新中—発掘後の石器研究

・研究費獲得までの長い道のり—研究資金の獲得と国際学会の発表

メキシコ中米の発掘道具 持ち運びに注意！  
超高額装置

おわりに—三大陸周掘り記 青山和夫

本書は、マヤ考古学を含む外国考古学の裾野を広げたいという強い思いをもって3人で執筆した。私の『マヤ文明』(岩波新書、2012年)や『古代アメリカ文明』(講談社現代新書、2023年)のような最新の研究成果を盛り込んだ入門書の読者だけでなく、読んだことがない(あるいは読まないかもしれない)読者も対象にしている。政府が提唱する「働き方改革」とは全く

無縁の考古学者の多忙な毎日の様子だけでなく、海外での調査・生活の喜怒哀楽や外国考古学の魅力が、読者に少しでも伝わればとても嬉しく思う。

本書の先輩本は、大城さん、芝田幸一郎会員と角道さんの共著『考古学者が発掘していたら、怖い目にあった話』（ポプラ社、2023年）であるが、本書は「多忙すぎる日常」に焦点を当てる。ポプラ社の編集会議では、「あの青山先生が、この手の本に執筆してくださるとは」と驚きの声が上がったそうだが、私はもしかすると出版業界で「堅物」と思われているのだろうか。

私の担当章「メキシコ・中米マヤ文明考古学者の多忙な日々」は、実は私の自伝でもある。「研究成果ではなく、青山先生の現地での経験や出来事を具体的に書いて下さい」という敏腕編集者の櫻岡美佳さんのリクエストに応えるべく修正加筆を積み重ねて、最終稿は5版を数えた。最近の出来事だけでなく、幼少の頃からいろいろ思い出しながら、自分にしか書けない日本から遠く離れた場所（ホンジュラス、アメリカ、グアテマラ、メキシコ）での経験談を書くのは極めて楽しかった。その楽しさを読者に味わっていただければ幸いである。

私が考古学に興味関心を持つようになったのは、小学校2年生の7歳であった。転校してきた友達から、近くの遺跡に「はっくつ」に行こうと誘われた（私は「発掘」という言葉を生まれて初めて聞いた）のである。その後、私は遺跡をうろついて地表面に落ちている土器片や石器を集めるのが大好きな少年、いわゆる「考古ボーイ」になった。「考古ボーイ」が大人に成長して、考古学者になったのが私である。

次に、私がマヤ文明を研究するようになったきっかけが、青年海外協力隊の考古学隊員として1986年にホンジュラスに派遣されたことであった。ホンジュラスでは、想定外の出来事が起こった。運命の女性ビルマと出会ったのである。私のスペイン語は、ビルマに愛を伝えるために飛躍的に上達した。「遠い外国の昔の文明」が、「恋人が生まれた国の愛の文明」、次に「妻と長女さくらが生まれた国の文明」になった。私は「石器の都市文明」マヤ文明の魅力に次第にハマっていき、ライフワークになった。

それから私はピッツバーグ大学に留学（1992

～1996年）し、マヤ文明研究の世界的権威ジェレミー・サブロフ教授に師事した。大学院1年から3年の毎年4か月（5～8月）は、ホンジュラスのコパン遺跡で石器を分析してデータを積み重ねた。大学院4年目の1996年には、生まれたばかりの次女美智子が元気な声で夜中に泣き出すと私も起きて、10年間の研究成果を博士論文に書くという、激闘の日々を送った。4年間で修士号と博士号を取得したのは、今でもピッツバーグ大学人類学部大学院の最短記録である。

グアテマラのアグアテカ遺跡の調査（1998～2005年）では、黒い物体（夥しい数の蚊の大群）に追われた。熱帯雨林での最良の蚊除け法は、コフネヤシの実をブリキのバケツの中で燃やすことであり、文字通り「煙が目にしみる発掘調査」を実施した。熱帯雨林の茂みには毒蛇が潜み、夜にはジャガーが徘徊する。セイバル遺跡の調査（2005～2018年）も同様だが、アグアテカ遺跡以上に「蚊の地獄」だった。

メキシコのアグアダ・フェニックス遺跡の調査（2020年～）では、男性作業員だけのホンジュラスやグアテマラとは異なり、女性作業員も参加するのが大きな特徴である。グアテマラの先住民主体の静かな発掘と比べると、全員メスティソの作業員による発掘はラテン音楽を流しながら手も動かして、実に陽気、にぎやかで活気がある。だが特に雨季には「蚊の地獄」かつ「マダニの地獄」になる。野外調査のもう一つの大敵が、気温40度前後の暑さである。

さて、私は2025年7月現在でマヤ文明の石器分析数（257,633点）と高倍率の金属顕微鏡による石器の使用痕分析数（8,756点）において、世界記録を更新している。特に後者は、私の一八番である。

本書は、読売新聞で2回紹介され、しんぶん赤旗、ラテンアメリカ時報、KADOKAWAのダ・ヴィンチWEB、FRIDAYデジタル、ダイヤモンド・オンライン等でも取り上げられた。特に読売新聞では、作家の宮部みゆきさんが書評を書いて下さり、販売実績が急増したようである。学術研究と一般社会のもつ知識の隔たりを小さくするために、親しみやすく低価格の読み物（一般書）を出版する意義は大きい。

### ●第17回東日本/第16回西日本部会研究懇談会 『アンデス形成期の二つの課題—海岸空白と鰐』

2024年11月16日（土）、東京大学本郷キャンパス・総合研究博物館3階第一演習室において、第17回東日本/第16回西日本部会研究懇談会「アンデス形成期の二つの課題—海岸空白と鰐」が開催された。今回は、東日本・西日本合同での開催であり、対面とオンラインによるハイブリッド形式で実施された。

発表者は、大貫良夫会員（東京大学名誉教授）、コメンテーターは鶴見英成会員（放送大学）が務めた。参加者は、会場・オンライン合わせて34名であった。

大貫会員からは、アンデス形成期における「海岸空白」の問題と、「鰐」の図像に関する広範な考察が提示された。また、これらのテーマに関して、鶴見会員から、中流域の事例をふまえたコメントが加えられた。

会場およびオンラインの参加者からも多くの質疑や意見が寄せられ、活発な議論が交わされた。

（東日本研究部会幹事 金崎 由布子）



古代アメリカ学会 第17回東日本部会／  
第16回西日本部会研究懇談会

2024年11月16日（土）14:30～16:20  
於 東京大学総合研究博物館3F  
第一演習室（ハイブリッド開催）

【プログラム】  
14:30～14:35 趣旨説明  
14:35～15:35 発表  
大貫良夫（東京大学名誉教授）  
「アンデス形成期の二つの課題—海岸空白と鰐」  
15:35-16:20 質疑応答・ディスカッション  
コメンテーター：鶴見英成（放送大学）

主催：  
古代アメリカ学会  
<https://americaantiqua.org>

問い合わせ：よろしくおねがいします。  
金崎由布子（東京大学）[kanesak@umt.u-tokyo.ac.jp](mailto:kanesak@umt.u-tokyo.ac.jp)  
古代アメリカ学会事務局 [info@americaantiqua.org](mailto:info@americaantiqua.org)

Zoom QRコード  
※会員以外の方でもご参加いただけます。

会場アクセス：本郷三丁目駅より徒歩約7分

## ●第18回東日本部会研究懇談会

### 『深層学習による三次元点群解析を土器分類に応用する—須恵器およびメソアメリカの土器を対象に—』

2025年6月7日（土）、東京大学本郷キャンパス・総合研究博物館3階第一演習室において、第18回東日本部会研究懇談会「深層学習による三次元点群解析を土器分類に応用する—須恵器およびメソアメリカの土器を対象に—」が開催された。今回は対面での実施となった。

発表者は、立田渉会員（金沢大学）、コメンテーターは野口淳特任准教授（公立小松大学）が務めた。参加者は7名であった。

立田会員からは、深層学習による土器分類の事例紹介を通じて、現状の成果や課題、将来の展望についての発表が行われた。野口特任准教授からは、幾何学形態計測学（GMM: geometric morphometrics）の観点からコメントが加えられた。

質疑応答では、若手研究者による意欲的な研究発表に対し、多角的な視点からの質問やコメントが寄せられ、活発なやり取りが行われた。

（東日本研究部会幹事 金崎 由布子）



古代アメリカ学会 第18回東日本部会研究懇談会

2025年6月7日（土）15:00～17:00  
於 東京大学総合研究博物館3F 第一演習室

【プログラム】  
15:00～15:40 発表  
立田渉（金沢大学）  
深層学習による三次元点群解析を用いた古代マヤ土器の形態学的分類（仮題）

15:40～17:00  
質疑応答・ディスカッション  
コメンテーター：野口淳（公立小松大学）



アクセス：本館3階は、15分前まで  
入館無料です。  
お問い合わせ：お申し込みください。  
お問い合わせ先：立田渉（金沢大学） kameta@un.kanazawa.ac.jp  
〒920-8601 石川県金沢市片山町1-10 TEL: 076-234-2111 FAX: 076-234-2112

## ●第 17 回西日本部会研究懇談会 『一般調査で何がわかるか』

5 月 17 日土曜日の 13 時 20 分より、関西外国語大学の ICC ホールにて、第 17 回西日本部会研究懇談会を開催した。今回は調査手法に焦点を当て、研究懇談会のテーマを『一般調査で何がわかるか』とした。当日は、午前中雨というあいにくの天気であったが、会員 7 名、非会員 4 名の参加があった。発表者は南山大学大学院の吉川主浩会員と埼玉大学大学院の手嶋啓仁会員、コメンテーターは山形大学の山本睦会員であった。

最初の発表は、南山大学大学院の吉川会員による「地域間ルートの空白を埋めるーペルー北高地アンカシュ県コロongo郡の踏査から」であった。吉川会員の発表は、アンデス山岳部を南北に通るルートを検証する踏査の成果に関する報告であった。調査は先行研究の緻密な検討に基づいており、調査対象地域として選定されたのは、データが少なくかつ先行研究でその存在が想定されている 2 本のルート（インカ道と仮説的なサンティアゴ・デ・チューコ盆地ルート）の分岐点に当たるアンカシュ県のコロongo郡であった。

39 遺跡の踏査資料に基づき、インカ道の元になるルートの成立時期は地方発展期であると考えられること、そして形成期の遺跡の分布状況はサンティアゴ・デ・チューコ盆地ルートの仮説を支持するものであることが論じられた。また、今後の課題として、形成期前期から後期にかけて、比較的標高の低い地域が利用され、形成期末期以降に高地が利用されるようになったこととラクダ科動物利用との関連性の検討が挙げられた。

10 分の休憩を挟み、手嶋会員による「ヘケテペケ川流域広域一般調査ー先史アンデス文明遺跡の現状ー」の発表が行われた。最初の発表が各地域を南北方向に貫く交流ルートに焦点を当てたものであったのに対し、本発表はヘケテペケ川流域という一つの河川流域に照準を合わせた調査に関するものであった。ヘケテペケ川流域を上流域、中流域、下流域の 3 つに分け、流域毎に踏査を行った成果が

報告された。

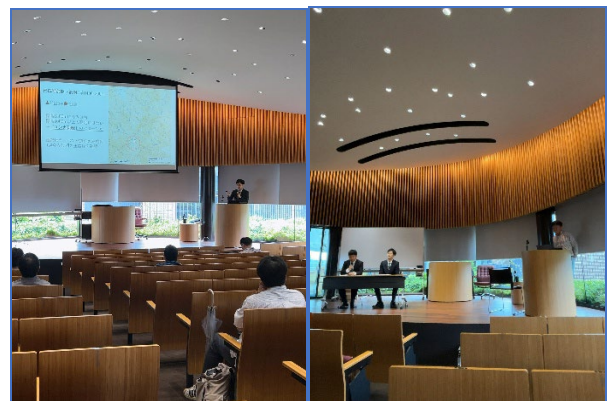
地域の形成期遺跡の現状把握と発掘調査対象遺跡の選定という調査目的が説明されたあと、下流域 12 遺跡、中流域 6 遺跡、上流域 6 遺跡の計 24 遺跡についての報告がなされた。最終的には、それらの遺跡のうち、ワカ・ブラバ遺跡を発掘調査対象としたことが述べられた。

手嶋会員の発表で印象に残ったのが、遺跡破壊の様子である。発表では、盗掘や耕作地の拡大によって遺跡の破壊が進んでいる様子が報告された。特に中流域、上流域における盗掘による被害は、想定していた以上のものであった。

続く質疑応答は、コメンテーターの山本会員の提案により、コメンテーターと発表者全員が壇上に上がっての対話形式で行われた。コメンテーターからは、まず各発表内容と執筆予定の博士論文との関連性についての質問がなされた。次に無数に存在したはずのルートの中から特定のルートに焦点を当てる場合の注意点と、形成期早・前期と後期における想定される問題の違いについてのコメントがなされた。

会場からも活発な質問が予想されたが、時間の都合により 1 名の方からの質問しか受けつけることができなかった。次の機会には質疑応答の時間をより充実させたい。

（西日本研究部会幹事 土井正樹）



（左：会場の様子、右：発表者およびコメンテーターによる対話の様子©関西外国語大学）

## ●国際学術講演会「テクノロジーが解き明かす古代ナスカ社会」

荘司 一步（山形大学）

2025年5月18日（日）、山形大学人文社会科学部1号館301教室において、国際学術講演会「テクノロジーが解き明かす古代ナスカ社会」が開催された。本講演会は、人工知能を活用して新たな地上絵の発見と分析を行う山形大学の研究成果を紹介するとともに、最先端の技術を用いて古代ナスカ社会の実像に迫るケビン・ヴォーン教授（米国カリフォルニア大学リバーサイド校、山形大学客員教授）を迎えて、ナスカ研究の最前線を紹介するものである。この講演会は山形大学ナスカ研究所と国立民族学博物館が主催し、山形大学人文社会科学部と科学研究費補助金基盤研究（A）「ナスカの地上絵を用いた「読み書き」行為の実態解明：人工知能と実証的アプローチの融合」が共催となり、古代アメリカ学会の協力を得た。当日は、学生や市民を中心として102名が来場するなど盛況であり、メディアの取材も入るなど、本講演会に対する一般社会の関心の高さがうかがえた。



公開講演会の様子

講演会は、森岡卓司氏（山形大学ナスカ研究所長、山形大学人文社会科学部長）の挨拶に始まり、坂井正人会員（山形大学学術研究院）と、続いてケビン・ヴォーン氏が登壇した。また、松本雄一会員（国立民族学博物館）が司会進行と通訳、質疑応答のファシリテーターを務めた。

坂井正人会員の講演では、ナスカの地上絵をめぐる一般的な基礎情報の紹介に続き、人

工衛星画像や航空写真、ドローンによる空撮画像を利用してきた自身の研究歴を振り返りながら、なぜ人工知能（AI）を利用した研究を始めるに至ったのかが説明された。一般的なメディア媒体や学術論文では紹介されないような、当時の思いや直面した課題などにも触れられており、参加者は熱心に耳を傾けていた。講演の後半では、地上絵がいつ作られたのか、どう描かれたのか、なぜ残ったのか、なぜ描かれたのかという疑問に答える形で研究内容の紹介があり、最後に地上絵の保護をめぐる現状の課題などが紹介された。

聴講無料  
事前申込不要  
定員：200名  
(先着順)

国際学術講演会  
**テクノロジー** が解き明かす  
Nasca Archaeology and Technology  
**古代ナスカ社会**

**5/18** 2025 日 **14:00 ▶ 16:30**

会場：山形大学  
人文社会科学部1号館 **301** 教室  
開場は13:30です

**プログラム**

14:00 開会  
14:10-15:00  
講演「人工知能を利用した世界遺産ナスカの地上絵研究」  
坂井正人（山形大学学術研究院教授）  
15:00-15:10 休憩  
15:10-16:10  
講演「ナスカ考古学を語る：ペルー南海岸の古代ナスカに迫る最新技術の応用」  
Kevin J. Vaughn (Kevin J. Vaughn) 英語（通訳あり）  
（米国カリフォルニア大学リバーサイド校教授・山形大学客員教授）  
16:10-16:30  
質疑応答  
司会進行・通訳 松本雄一（国立民族学博物館教授）  
16:30 閉会

主催  
山形大学ナスカ研究所  
国立民族学博物館

共催  
山形大学人文社会科学部  
科学研究費補助金基盤研究（A）「ナスカの地上絵を用いた「読み書き」行為の実態解明：人工知能と実証的アプローチの融合」  
研究代表者：坂井正人（山形大学学術研究院）

協力  
古代アメリカ学会

お問い合わせ先 山形大学ナスカ研究推進センター  
〒990-8560 山形県小国町1-4-12 電話番号 023-628-4470  
E-mail nasca@human.kj.yamagata-u.ac.jp

公開講演会のポスター・チラシ

ケビン・ヴォーン氏の講演では、ナスカ文化の社会像をめぐる一般的な見解と研究史が明快に示され、それに対する自身の研究歴が紹介された。ケビン・ヴォーン氏が実施してきたミトコンドリア DNA 分析や安定同位体

分析、土器の胎土分析、年代測定を用いた分析をはじめとして、多種多様な考古科学の方法と結果が説明された。坂井会員の AI を利用した研究を含め、考古科学の進歩がナスカ文化に対する理解を大きく変えてきたことがわかりやすく紹介され、参加者もナスカ文化と考古学についての関心をより深めている様子であった。

質疑応答においても、山形大学の学生や市民からの質問が活発に寄せられており、予定していた講演会の時間を超過するほどの盛況をみせていた。中には、登壇者らも感心するような専門的で多角的視点からの質問もあり、本講演会が後進の育成や一般社会への情報発信のために大きな役割を果たしたことがうかがえた。古代アメリカ学会の協力により、こうした機会が今後も積極的に創出されることを期待したい。

---

---

### 会員の受賞

---

---

本学会の坂井正人会員が、Cozzarelli Prize (コッツアレリ賞) を受賞されました。本賞は、米国科学アカデミー紀要に掲載された論文からわずか 6 本だけが選ばれる大変名誉ある賞です。坂井会員は長年にわたりナスカ地上絵調査を続けられ、数々の成果を発表されてきました。その研究の蓄積

に、航空写真の AI 分析と言う革新的技術が加わったことにより、画期的な成果を得られた研究が高く評価されました。行動・社会科学部門において、日本の大学に所属する研究者としては初めての受賞という快挙です。心より御祝いを申し上げます。

(編集委員)

---

---

### 会員の叙勲

---

---

加藤泰建会員が、2025 年度の春の叙勲において、長年にわたるアンデス研究と日本・ペルーの国際交流推進のご功績により、瑞宝中綬章を受けられました。加藤会員は第 4～5 期および第 8～9 期の会長を務めら

れるなど、学会の発展にも多大なご尽力を頂きました。今回の叙勲は、本学会にとってもたいへん喜ばしいことと思います。誠におめでとうございます。

(編集委員)

## 事務局からのお知らせ

### 1. 第30回研究大会・総会の開催について

古代アメリカ学会第30回研究大会・総会を、2025年12月6日(土)～12月7日(日)の2日間にわたって、国立民族学博物館で開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

本学会では研究発表について審査制をとっています。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による別紙「第30回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、研究大会、総会のご出欠については、メールにてお知らせしたURLから2025年9月30日(火)までにご回答ください(締切厳守)。総会にご欠席の方も、同じURLから委任状を提出いただけますのでご協力をお願いいたします。

#### 記

古代アメリカ学会第30回研究大会・総会

1. 日時：一日目 2025年12月6日(土)

研究大会 13:00～16:30(予定)

総会 16:30～17:30(予定)

懇親会 18:00～(予定)

二日目 2025年12月7日(日)

研究大会 09:00～12:00(予定)

(発表本数が多い場合は、午後の部もおこないます)

2. 会場：国立民族学博物館

本館 2F 第4セミナー室

この件につきましてご不明の点がございましたら、事務局([info@americaantigua.org](mailto:info@americaantigua.org))までお問い合わせ下さい。

### 2. 第30回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第30回研究大会実行委員長  
松本 雄一

会員より申請があった研究発表等については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表承諾の可否について通知いたします。

発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

#### 記

以下の事項を記入し、**Word ファイル**にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。

1. 発表申請者(会員に限ります)
2. 発表申請者住所・e-mail(発表申請者に対して審査結果をメールで通知します)
3. 発表カテゴリー(研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか)
4. 発表タイトル
5. 発表著者(共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください)
6. 口頭発表者(実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります)
7. 発表要旨(研究発表：1200字程度、調査速報：800字程度、ポスターセッション：800字程度。文字数は±10%を許容範囲とします。要旨とは別に1-2枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください) A4判にて、1ページ40字×36行、横書き、余白は上35mm、下・左・右30mm、文字は10.5ポイントで作成してください。

(※発表時間は、質疑応答を含め調査速報20分、研究発表30分を予定しています。ポスターセッションはA0で2枚以内によるものとします。)

\*送付先：[info@americaantigua.org](mailto:info@americaantigua.org)(学会事務局)

\*締切：2025年9月30日(火)午前10時(メール必着)

古代アメリカ学会では、会員が共有する関心テーマについて集中的に議論できる場を提供するた

め、第 20 回研究大会より分科会枠を導入しています。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて 3-5 名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20 分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分科会ごとに判断してください。口頭発表の時間を削ってコメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことも可能です。なお分科会は、通常の研究発表・調査速報と同じ会場で開催され、発表時間が重なることはありません。ただし口頭発表できる機会は、研究発表・調査速報・分科会発表をあわせて一人 1 回です。分科会ではコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者(変更不可)、趣旨説明(1200 字程度)、全発表者の要旨(各 800 字程度)を取りまとめて、代表者として申請してください。送付先・締切は他の発表と同じです(上記をご覧ください)。なお分科会代表者・発表者は、オンライン出欠確認フォームで「発表申請」の「有」を選択してください。

審査結果については、10 月 14 日(火)頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもお知らせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。なお、発表者となる会員(共同発表者を含む)は、9 月 30 日の時点で前年度分までの会費の滞納がないことを条件とします。

※参考 「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ(平成 23 年 12 月 2 日役員会決定)」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

(内容)

(1)研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的研究状況において一定の水準に達していなければならない。

(2)発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに

関する権利を侵害してはならない(オンライン開催の場合、著作権には例年以上に配慮を要しますのでご注意ください。)

(形式)

(1)(口頭発表をおこなうことができる者)

口頭発表者(実際に口頭で発表をおこなう者)は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画した招待講演・発表等についてはこの限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第 2 発表者以下でも差し支えない。

(2)(発表者および共同発表者の記載順)

発表者名(単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など)は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第 2 発表者以下の共同発表者となることができる。

(3)(複数の口頭発表についての制限)

1 回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人 1 回とする。ただし、複数の共同発表者(記載順を問わない)となることができる。

以上

### 3. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお 2 年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行(振替口座) 口座番号: 00180-1-358812

加入者名: 古代アメリカ学会

みずほ銀行山形支店

口座番号: 1211948(普)

口座名義: 古代アメリカ学会

ゆうちょダイレクトをご利用の場合は、通信文欄にお支払い年度をご記入ください。

(例) 2025 ネンドカイヒ ※数字および全角カタ

カナのみの入力となります。

PayPal でのお支払いをご希望の方は、[account@americaantigua.org](mailto:account@americaantigua.org) までご連絡ください。PayPal ご利用の場合、決済は日本円でおこなわれます。年会費に手数料（2025 年 1 月現在、海外決済：4.1%+40 円、国内決済：3.6%+40 円）を含めた額をお支払いいただくことになりますので、ご了承ください。

【重要】学生会員の会費納付書への所属機関記入について

本学会では学生会員に会費優遇制度を設けていますが、学生期間終了後は速やかに一般会員資格に移行していただくために、「払込取扱票」で納入する場合には所定欄に現在の在籍校と学年を明記していただいておりますのでご協力をお願いいたします。ゆうちょダイレクトをご利用の場合は、通信文欄に在籍校と学年をご記入ください。その他ネットバンキング等を通じて納入する場合は、振り込み前に事務局へ現在の在籍校と学年をご連絡願います。

【重要】所属機関が会費納入する際の納付書再発行費用について

文部省科学研究費補助金等で会費を納入いただくにあたって、会員が所属する機関から納付書を再発行するよう依頼があった場合、その送付にあたっての送料は納付者の負担となります。ご希望される方は、あらかじめ学会事務局までお問い合わせください。

〈事務局からのお願い〉

現在、古代アメリカ学会では、学会とかわる諸情報の連絡、および周知にメールを使用しております。学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特に Gmail などのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレ

スを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

## 4. 原稿募集

### ①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第 29 号（2026 年 12 月発行予定）に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集します。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、最新の寄稿規定および執筆細目（本学会ウェブサイト掲載）をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては「投稿エントリーカード」の提出が必要となります。「投稿エントリーカード」は、本学会ウェブサイトよりダウンロードしてください。第 29 号への掲載を希望される場合の締め切りは、カテゴリーにかかわらず、2026 年 5 月 20 日です。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読（原稿受領後 1～2 か月程度で終了予定）の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先：

運営委員、会誌編集担当

E-mail : [aant.edit@gmail.com](mailto:aant.edit@gmail.com)

### ②会報「51 号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

#### 【内容】

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。  
会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

○特集記事「思い出の現場メシ」

皆様にはどのような思い出の現場メシがありますか？論文執筆中に食べていたあれや、調査仲間とわいわい食べたそれ、ホームシックの中で食べ続けた現地ご飯など、味覚とリンクした様々な思い出とともに皆様の現場メシをご紹介します。思い出は伴わないけれど紹介したい現地フード情報も OK です。皆様のご寄稿をお待ちしています。

#### 【形式】

○原稿字数は、基本は写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。短い場合、超える場合も柔軟に対応いたしますので、会報担当委員まで事前にご相談ください。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

○特集記事については、200 字以内（写真・図版除く）の原稿も募集します。匿名もしくはイニシャルでの寄稿も可能です。SNS のような気軽な寄稿もお待ちしています。

#### 【掲載】

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、担当にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

#### 【投稿先・締切】

○添付ファイルの形で下記までメールにて送信してください。

お問い合わせ先：

瀧上舞、渡辺裕木（運営委員会報編集担当）

E-mail : [aant.newsletter@gmail.com](mailto:aant.newsletter@gmail.com)

（会誌とは異なるのでご注意ください）

○投稿締切 2026 年 6 月 15 日

○発行予定 2026 年 7 月下旬

=====

今回の特集記事では、多様な教育機関における古代アメリカ教育について6人の会員に執筆して頂きました。編集担当から執筆を依頼した方もいれば、メーリングリストでの募集を見て寄稿して下さった方もいます。いずれの方も古代アメリカ研究の普及や次世代へのバトンパスを、様々な試行錯誤や実践で工夫されており、たいへん参考になりました。私も現在の所属機関で、どのように古代アメリカを来館者に伝えていくか、工夫を凝らしていきたいと思います。本会報にご寄稿くださった皆様に厚く御礼を申し上げます。

(瀧上)

原稿を執筆して下さった会員の皆様に厚くお礼申し上げます。特集記事では、多様な教育現場でのリアルな経験をご紹介いただき、課題の共有が期待できると共に、「研究の裾野を広げる」ことの困難を再認識いたしました。正に編集作業中、私も勤務する大学の学生から、高校時代の世界史教員に「ラテンアメリカは文が残っておらずよく分からないから、(この項目は) すぐに終わる」と言われ、資料も他の地域に比べ極端に少なかったと伝えられ、一瞬言葉に詰まるという体験をいたしました。今後とも、古代アメリカ研究の意義、魅力の普及に資する企画に、会報でも取り組めたらと考えております。

(渡辺)

発行 古代アメリカ学会  
発行日 2025年7月31日  
編集 古代アメリカ学会  
会報担当：瀧上舞  
渡辺裕木

古代アメリカ学会事務局  
〒466-8673  
愛知県名古屋市長区山里町 18  
南山大学 第一研究棟 4 階  
E-mail : [info@americaantigua.org](mailto:info@americaantigua.org)  
郵便振替口座 : 00180 - 1 - 358812  
ウェブサイト URL <https://americaantigua.org/>